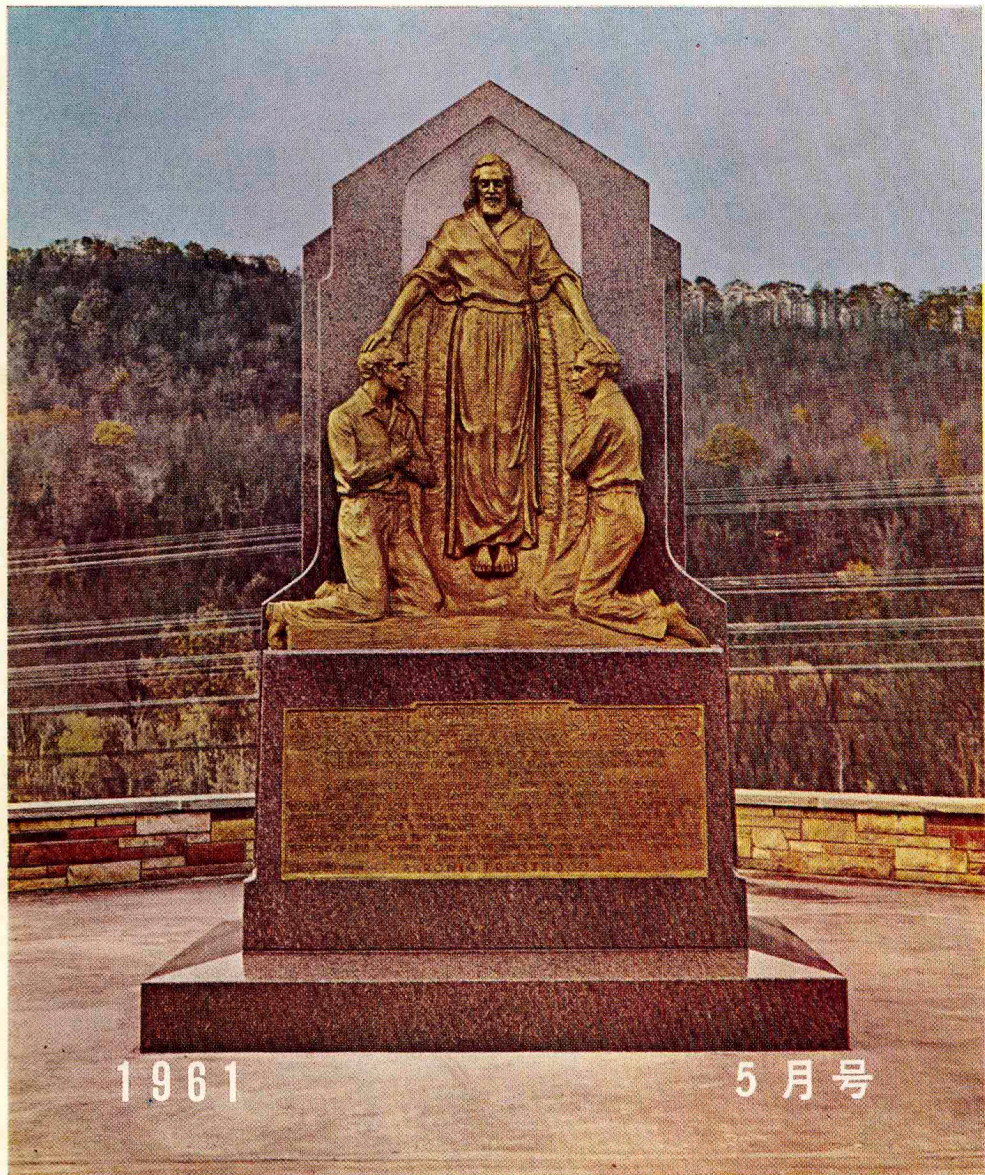


道 徒 の 聖

一九五八年三月十七日第三種郵便物認可（毎月一回一日発行）
第五卷第五号一九六一年五月一日発行



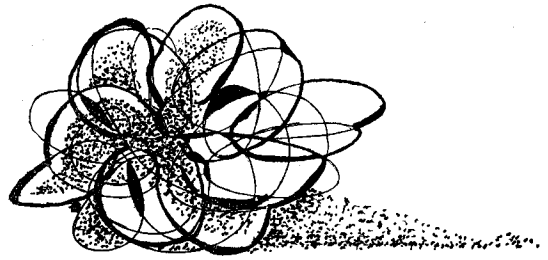
1961

5月号

末日聖徒イエス・キリスト教会

聖徒の道

1961年5月号



〔予言者のことば〕

わが宣教師たち …… デビッド・O・マッケイ…(233)

〔伝道部長メッセージ〕

神の真の教会 …… ボール・C・アンドラス…(237)

大会特集

そのⅠ …… 西中央地方部 ……(241)

そのⅡ …… 北海道地方部 ……(245)

モルモンの教義

「回復」の教義 …… 佐藤竜猪…(249)

ヤンガーゼネレーション

母の日におくる二題

母について …… 塩 隆彦…(253)

僕の母 …… 上野山寿樹…(254)

私の体験と証 …… 水村真由美…(255)

人を漁する者たち ……(257)

愛読者のみなさまへ ……(266)

原稿募集 ……(267)

ともにかんがえよう

信者のあり方 …… 田川幸子…(268)

質問への答

律法なくして死にたる者の救い…

ジョセフ・フィールディング・スミス…(270)

海外トピックス

アララッド山中に発見

されたものはノアの箱船か? ……(274)

けいず …… 屋号の話 …… 田中偉夫…(276)

メルケセデク神権 ……(278)

アロン神権…

ブランチ・ティーチング・レッスン(5月用)…(279)

日曜学校ガイド6月用 ……(280)

MIAリーダー ……(284)

扶助協会レッスン ……(286)

末日聖徒イエス・キリスト教会歴史粹(17)

…ジョセフ・フィールディング・スミス…(289)

伝道本部だより ……(295)

ラスト・ワード ……(296)

も
・
く
・
じ



大管長 デビド・O・マッケイ

わが宣教師たち

大管長　デビッド・O・マッケイ

「汝ら行け…而して万国の民に教えよ」と復活のキリストは宣言したもうた（マタイ伝二十八〇十九参照）。「この約束は汝らと汝らの子らとすべての遠き者すなわち主なるわれらの神の召したもう者とに属くなり」（使徒行伝二〇三十九）。

「これを世の人々に宣ぶるよう誠命を与えたれど」「されどこは…信仰もまた世に高まり」「わが永遠の誓約は確立」せられんためであると、主は予言者ジョセフ・スミスを通して仰せになった（「教義と聖約」一〇十八、二十一、二十二）。

これらの召しと誠命とに従って、末日聖徒イエス・キリスト教会は過去百三十年の間多くの宣教師を世に送り出して居り、その結果数々の祝福を受けている。

これらの宣教師は誰であるか。もちろん、教会員であるあなた方は彼らをよく知っている。たいていわが教会の宣教師は、経験に長じている人々の間にちらほら見える若者たちである。ここで、福音を宣べ伝える直接の責任はわが教会の神権者の双肩にかかっていると一言してもさしつかえない。女子の会員が、家庭集会、初等協会、MIA（相互発達協会）および日曜学校等に於て示す実力、また宣教師として他の面で働く場合の能力は共に最高級のものであり、その上喜んで働く点、また熱心に働く点さえ若い男子に劣っていない。それでも、女子の会員は福音を宣べ伝える直接の責任を負ってはいない。

教会を代表する者として選ばれるこの若者たちは誰であるか。彼らは庶民の中から出てくる。彼らは農民であり職人であり、工員であり、銀行員であり、会社員であり、その他の職業に従事している者たちである。これらは皆宣教師

の働きを終って帰った後、気の合った愛する者同志で幸福な家庭をつくることを待ち望んでいる若い者たちである。長老の一団はかつて三つの主な原則を公けにしたが、これを採用することは主の御業を正しく進めるために絶対に必要であると思われる。それらはすなわち責任と一致と活動の三つであった。この三つの徳は宣教師と同様、一般教会員にも適用することができる。

世界中で、わが教会の長老たちほど大きな責任を負っている男の人々はほかにない。完全な意味に於て彼らは「いと高き神の祭司たち」である。霊に関する知識と数々の祝福を受けることは彼らの特権であり、これらを隣人に分け与えることは彼らの義務である。それであるから、神の承認を受けた代表者としての彼らの責任は明らかである。これと共に彼らは自身を「純まことく、世の罪に染まぬよう」に保つ責任があり、また福音の文獻を普及させる義務があるといつも強く言われている。一言で言えば、長老の責任は (一) 神に対する義務 (二) 自身と自身の愛する者に対する義務 (三) 教会に対する義務、の三重の責任である。

一致ということとはワード部、支部および一人一人の会員にとって特に大切であると言える。力を合わせて努力しなければならぬということは、会員の一人一人がみな宣教師になる必要があるということと同様、特に大切なことである。責任の持っている落着きの力、和合一致の力、良く指導された活動がもたらす必然の成長などは、大きな影響を及ぼす要素である。

活動の中に成功に至る唯一つの道がある。これはこの世の事に就いても同様である。それだけではなく、喜んで神のみこころを行う心を実際に現わし活動を実際に示すことによつて福音の証しがいよいよ強くなる。

これから宣教師になる人たちに私は次のように言いたい。

当教会の中には、宣教師が居るあらゆる国から来た人々がある。私は当教会の若い男女、とくに若い男の人々は高等学校や大学でこれらの国の言葉を学習するように勧める。

長老は一人のこらずいつもクリスチャンの紳士でなくてはならない。紳士とはどのような人であるか。誰でも秘密のない人、すなわち何も隠すもののない人、罪の自覚があるので元氣のない顔つきをしていない人である。また誰でも忠実な人、すなわち智慧の言葉はもとより、真理に対して、徳に対して、教会の原則に対して忠実な人、まことにそのふるまいが親切丁寧、自ら恥を知り、正しく他人を判断し、法律に忠実であるように自分の言葉にも忠

実であり、神に仕えて忠実であると同じように人にも仕えて忠実である人、このような人こそ本當の紳士である。それであるから、世界中どこに於ても末日聖徒イエス・キリスト教会を代表する長老は、このような人でなくてはならない。

伝道部に於て二年もしくは三年の間宣教師となつて奉仕の働きをすることは、このような特権を得た人に与えられる祝福である。この教会のどこへ行つても、息子や娘を宣教師として世の中に出した多勢の両親は、その通りであると思つてゐる。これらの両親は宣教師の経験が自分の息子や娘に与えた価値を感謝してゐる。その息子や娘たちは宣教師になつて始めて家庭や福音の有難さがわかるのである。また両親は、息子たちが宣教師となつて活動をして始めて、それまでおそろしく心に感じてはいたが言い表わしたことのなかつた、福音が真実であるという知識を自覚するようになることを知つてゐる。

監督諸氏よ、これらの代表者に与える利益のことよりも、むしろ宣教師としての召しに伴ういろいろの責任を遂行する彼らの準備と適性の方を考えるのがわれわれにとつてよいことである。宣教師を選ぶに當つては、次の質問を心に留めるのがよろしい。すなわち、彼は教会を代表する資格があるか。彼は誘惑に抵抗する強い意志の力をもつてゐるか。彼はこれまでワード部に居るうち、身を純く保つていたか。またその標準によつて、伝道へ行つたときに逢うかも知れない誘惑に抵抗する力のあることを自ら証明したか。彼はワード部に於て教会のため活潑に働いてゐるか。彼は教会が世の人々に提供せねばならぬものが少しでも解つてゐるか。彼は祈りその他の経験により、神が近くにましますことを感じてゐるので、肉身の父に近づくように主に近づくことができるか。

教会ではこのような効果を挙げる機会がいくらもあるによつて、以上の資格と要求とはそれほど高過ぎることはない。補助組織に於てはもちろんのこと、定員会でいろいろな教えや経験を受けるので、年若い男子の会員たちは純い生活を送つてゐるなら宣教師となつて教会を代表する準備ができてゐる。

若い男子の会員が宣教師の旗の下に参加するとき、それは必ず彼が人格に於ても信仰に於ても主に仕えたいという願ひに於ても、あらゆる点ですぐれてゐるということの意味するように、この考えをわが教会のいたるところで強調しよう。

本當のキリスト教は愛の實踐である。隣人に無我の愛を示すことが神に対する愛を現わす一番よい道である。これが宣教師の働きの眞の精神である。



ポール・C・アンドラス

神の真の教会

— 啓示の岩の上に建てられる —

啓示とは人間に神のみこころが伝わることであります。それでありますから、神の真の教会は当然啓示に基づいて建てられなくてはなりません。神のみこころが伝えられなければ、人間は神の教会を組織する方法も解らなければ、また組織をする権能もないにちがいないからであります。

言葉を変えて言えば、神から引継ぎ啓示があるということは神の真の教会に見られる特色であります。救い主は自ら、主の教会が啓示の岩の上に建てられなくてはならないことをはっきりとお教えになりました。

「イエスがピリポ・カイザリヤの地方に行かれたとき、弟子たちに尋ねて言われた『人々は人の子をだれと言っているか』。彼らは言った、『ある人々はバプテスマのヨハネだと言っています。しかし、ほかの人たちは、エリヤだと言ひ、また、エレミヤあるいは予言者のひとりだ、と言っている者もあります』。そこでイエスは彼らに言われた、『それでは、あなたがたはわたしをだれだと言ひか』。シモン・ペテロが答えて言った『あなたこそ、生ける神の子キリストです』。すると、イエスは彼にむかつて言われた、『バルヨナ・シモン、あなたはさいわいである。あなたはこの事をあらわしたのは、血肉ではなく、天にいますわたしの父である。そこでわたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。よみの力もそれにうち勝つことはない』(マタイ伝十六〇三十一―十八)。

ペテロが「あなたこそ、生ける神の子キリストです」とはっきり言ったとき、イエスは、この事をペテロに啓示されたのは父なる神であるとペテロにはっきりお言いになりました。それ



からイエスはつづいて、この啓示の岩の上にわたしの教会を建てようとお言いになりました（十六〇十八）。この聖句は多くの人が誤った解釈を下して居ります。たとえて申しますと、カトリック教会では、この聖句の意味はキリストがその教会をペテロの上に建てるとお言いになったと解釈して、啓示の岩ということを見落しておりません。ちよつとこの点を考えて見るならば、神が神の教会を啓示の岩の上にお建てになるということは全く筋の通つたことであるが、神が神の教会を或る人間の上にお建てになると考えることは全く筋が通らないことであるということがはっきりといたします。イエスは実際にその教会を啓示の岩の上にお建てになりました。ペテロは十二使徒のかしらでありましたが、主の教会はその上ではなくて啓示の上に建てられたのであります。

イエスが、親しく導きと恵みを施したもうことによつてこの地上に神の眞の教会をお建てになつてから間もなく、この神の眞の教会は地上から姿を消してしまいました。使徒たちは殺されるかまたは追放されてしまいました。これと共に神権もまたなくなつてしまいました。神のみどころが教会に伝えられることも止まりました。眞の教義は、当時広く行われていたが間違つてゐる信仰に一致するようになつてしまひました。純粹なままのいろいろの儀式は変わるかまたはことごとく亡びてしまひ、その一方人間のつくつたいろいろの儀式がつけ加えられました。コンスタンチン大帝がその滅び行く領土を強化しようとして努力をするに當つて、キリスト教をローマ帝国の国教にしたときには、もはやずつと前に神の眞の教会がこの地上から姿を消してしまつておりました。

それから何世紀もたつて、ヨーロッパ文芸復興の戦士である大宗教改革者たちは、少くともある程度まで、神の眞の教会が腐敗墮落してしまつてゐることを認めましたから、その腐敗した組織から離れて各々の宗派を創立いたしました。しかしながら、これらの人々が創立した宗派といへども、その離れたもの組織が眞の教会でないと同じように眞の教会ではありませんでした。

このような有様でありましたが、神の眞の教会の回復が十九世紀の前半に起りました。そして「前の時代」にあつたと同じ神の眞の教会が啓示の岩の上に建てられました。すなわち、千八百二十年に、天にまします父なる神とその御子イエス・キリストとは天の邸やうたから天降つて、実際にジョセフ・スミスの前に立つて彼に姿を現わし、眞の教会はずでに亡びてしまつたから今や回復が行われようとしてゐると宣言なさいました。この出来事は、世界歴史に現われた最も大きな啓示の一つであります。その後千八百二十三年と、それにつづく四年の間、天使モロナイが神から遣わされた使者として毎年ジョセフ・スミスを訪れ、それまで隠されていた金版を明らかにすると共に、神の眞の教会の回復を始めるに必要な知識を彼に示しました。このようにして、千八百二十九年五月の十五日にはパプテスマのヨハネが復活した者としてジョセフ・スミスとオリヴァ・カウダリの二人を訪れ、アロン神権をこれら二人と世の人々に回復いたしました。それから数週間たつと、ペテロ、ヤコブおよびヨハネの三人がジョセフ・スミスを訪れてメルケゼデク神権を回復いたしました。このように準備が成りまた承認も受けましたから、ジョセフ・スミスは千八百三十年四月六日、ニューヨーク州の法律に従つて教

会を公けに組織しました。そして、千八百三十六年の四月三日にはオハイオ州カートランドの神殿に救い主御自身を始めとしてエライジャ、エライヤスおよびモーセがジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの二人に現われて、大切な知識を伝えると共に非常に重要な神権の鍵を数々授けました（「教義と聖約」第百十章参照）。

これまで私たちは、神から直接に啓示のあった例を引いてまいりましたが、神はまたみこころを人間に啓示するためにもう少し直接的でない方法もおとりになります。多分一番普通にある種類の啓示は靈感でありましょう。すなわち、神のみこころが聖霊によって人間の心に生き生きと感じられることであります。また「聖いみたま」の導きによる霊夢や示現も、神のみこころをあらわすために用いられることがあります。

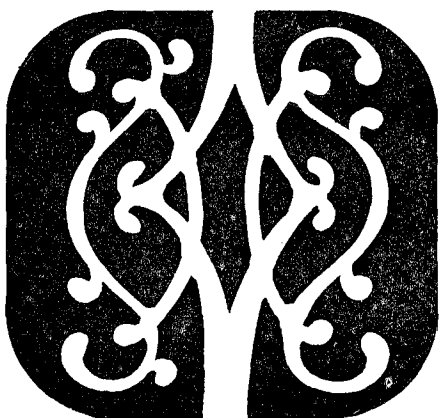
神がそのみこころをあらわすためにどのような方法をお使いになっても、啓示には一定の秩序というものがあって、神はその秩序をお変えにならないということについて私たちは間違わないようにしなくてはなりません。すなわち、教会全体に関する神のみこころが伝えられるときには、いつも教会の大管長に啓示が下ります。実際マッケイ大管長は神の王国であるこの教会を管理し、また教会の事務を処理する場合毎日啓示を受けておられます。また十二使徒会の会員その他の幹部の方々も各自の義務を遂行するに当って啓示を受けておられます。わが教会の役員も会員も一人のこらず、教会に於ける各自の義務を遂行するに当って、また各自が個人的の事を処理するに当って神から啓示を受ける資格があります。

しかしながら、神は教会全体に関する啓示を教会の大管長以外の

人にお下しになることはありません。それでありますから、教会員の中のある人が、教会を如何に経営するかを大管長に言えと啓示によって命ぜられたと主張するとき、このような人は確かに間違っております。これと同じように、教会の幹部以外のどの会員であつても、その人が伝道部を如何に経営するかを伝道部長に言えと啓示によって命ぜられたと主張するとき、その人は確かに間違っていると云えるでしょう。この秩序の原則は教会組織の全体にわたって適用されますから、支部長もしくは地方部長より上の職に任命されていない会員が、主から啓示を受けたと主張して、支部もしくは地方部を経営するやり方を支部長もしくは地方部長に言おうとするならばこのような人は確かに間違っております。

神の眞の教会であるわが教会は啓示の岩の上に建てられております。わが教会の会員の一人一人が受けて、その心の中にちようどペテロのように、キリストは生ける神の御子であつてこの教会のかしらであるということを知るところの啓示は、まことにモルモン教の生きる力であり強さであります。

「さて、この子羊につきて為されたる様々の証の挙句、われらの為す最後の証はすなわち『主は実に生きたもう』こと是なり。われらは、彼がすなわち神の右に座したもうを見たり。また、御父の生みたもう独子なりと証したもう声を聞けり」（「教義と聖約」七十六〇二十二、二十三）。「それ主なる神はその隠れたる事をその僕なる予言者に伝えずしては何事をも為したまわざるなり」（アモス書三〇七）。



地方部大会特集

その I

西中央地方部

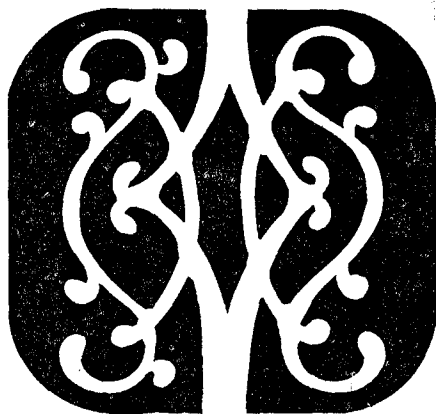
■ 3月18～19日

その II

北海道地方部

■ 3月25～26日

この大会記事は地方部編集員と大会に出席した両地方部の多勢の兄弟、姉妹の協力によるものでありご協力に感謝します



—その1— 西中央地方部大会



MIAの大会に出席して

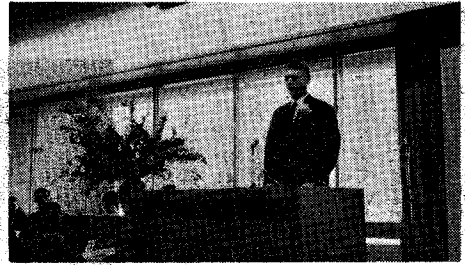
三好節子 (三ノ宮支部)

三月十八日午後六時半神戸港を眼下に見る都心から少し離れた繊維会館にてMIAの春季大会が開かれました。私も求道者としてこの大会に出席させていただきましたのは本場にすばらしい体験でございます。

大会に出席させていただいたのはこの前の秋季大会とで二度目でございますがこの時の時とどうようすばらしい御霊を感じて喜びの一夜を過ごすことが出来ました。西は

福岡東は名古屋と各支部の方々の日頃の練習の賜を見させていただきまた支部の皆様と宣教師の方たちとご一緒にやって下さったコーラスや劇等家に帰ってからもまだその余韻のさめやらぬ歌持で机に座ってぱーとしておりますとまだあの歌声が耳の底から再び神経を通して感覚をゆさぶり色々な方々の顔がぼんやりと浮かんでまいりました。とりわけあの「リアホナ」の劇は印象的でございます。名古屋支部の方々は十一月からその準備にかかったと申したいらっしゃいましたが本場に素晴らしい出来ばえでした。ニーファイになられた方その両親お兄さんになられた方々のお顔を思い出し、そしてあの物語を思い出す時こうして今もなお神の国が建設されようと努力されていることをはっきりと感じ取ることが出来ました。残念だったのはせっかく多くの支部の方が来ていらっしゃるのにお友だちが出来なかったことでございます。何か私自身勇気も無かったのかもしれないしちょっと話しかけにくいように感じたのでございますが、この感じも次々と繰り展げられるアトラクションの前には泡の如く消え去り舞台と一体となって楽しむことが出来

ました。外国人宣教師の方々が沖繩の踊りを踊っていらっしゃるのを見ていますとユーモアがあつてどんな気難かしい方でも笑い出さずにはおられなかったことでしょう。そして八時半、二時間がほんのまばたきする間のように感じられ司会者の閉会の詞がありました折やつと我に帰りました。素晴らしい御霊を感じた気持で力一杯八十番「福音を待む」の讚美歌を歌いこの本場に楽しかったひと時を過ぎて下さった神様そして会員の方々に深くお祈りをしていくら言っても言い足りないほどの甘美、優雅、典雅、すべての美しい言葉を当てはめたいような気持に満たされました。そしてこの気持を一つも残さず家に持って帰ることが出来るように一言もおしゃべりせずに帰途につきました。そしてこの次のMIAの大会にも出席出来そうですように、この教会が大会を開く度毎に素晴らしい会員が次々と誕生して私も早くこの真理の教会の会員になるためにがんばらねばならない事を決心し、明日はまた大阪で一般大会が開かれますがそれも今日のように、それよりもっと素晴らしい会でありますようにお祈りして床につきました。



愛に満ちあふれた
感激的な西中央地方部大会

神尾 昇 (三ノ宮支部)

一九六一年度春季西中央地方部大会は三月十九日前日のMIA大会の行われた神戸織維会館から会場を大阪の商工会館に移し開催されました。あいにく早朝より小雨が降り出し一日中うすら寒い天気が続きましたが会場は、外の憂鬱な天気とは正反対に明るく元気にそして主を讃美する歌声が会場一ぱいに響き渡り、主のみたまを身近に感じる靈的な雰囲気のもとで、遠くは福岡柳井、金沢、名古屋支部の兄弟姉妹が多数参加し大変盛大に終始致しました。

この日は私たち末日聖徒にとって記念すべき日でありました。朝早くから神権会、扶助協会が開かれましたが特に神権会は前回までとは異りアロン神権会とメルケゼデク神権会の二つのグループに分かれました。これは西中央地方部大会では始めての試みであり神権者がふえこのように二つの会を設けることが出来たことは本当にすばらしいことであり主のたいなる御力を感ずることが出来ました。

一般大会における兄弟姉妹のすばらしい話、またアンドラス伝道部長の全世界の各伝道部におけるモルモンの驚異的な増加という大変うれしい報告があり私たちが引続き、尚いっそうの努力をするならば神様の王国はすぐに建設されるであろうと力説なさいました。

それには私たちは常に良く働き、教会のために自分の持っている力を犠牲にし、進んで献金しました世の人の良き模範ともなり最高のモルモン一〇〇%のモルモンになるように常に心掛けるべきである。けれども最低のモルモン五〇%のモルモンにならぬよう常に主に祈り導きを得よという力強い説教を聞くことが出来私の体の中に大き

な力が湧きあがって来るのを感じました。一般大会に引続き午後から証詞会が開かれました。多くの兄弟姉妹の心強い証詞を聞くことによって私たちは自分自身の証詞をも強めることが出来ました。

日本人による支部長会組織される

この証詞会の時に非常にすばらしい記念すべきことがアンドラス伝道部長より発表されました。すなわちこの西中央地方部にも日本人による支部長会が組織されたことでした。

柳井支部・林兄弟、広島支部・築田兄弟、名古屋支部・柳田兄弟、阿部野支部・周藤兄弟、岡町支部・上野山兄弟、西宮支部・安芸兄弟、三の宮支部・山邑兄弟以上七人の日本人の支部長が誕生しました。この出来事は実にすばらしいことであり私たちに与えられた予言が着々と成就されていくことがわかりそこに神の大きな祝福を感じました。

私たち小さい人間が一人前になるためには自分自身の努力もさることながら大きな愛の力が必要です。この愛の力は大会の会場に満ちあふれていました。

私たちはこの愛を家庭に持ち帰り私たちの一番身近な人たちに与えたいと思います。

—西中央地方部大会—

大会に出席して

辻 達 男
(岡町支部)

大会に出席するようになって五年の月日が流れた。いつの大会も他支部の多くの兄弟姉妹と会える喜び、愛する伝道部長の素晴らしいメッセージをきき、おおいに心に動ずるものを与えられてきた。けれども今回ほど感銘の深い大会はなかったであろう。

第一に神権会は初の長老定員会の集いが開かれ、伝道部長長老定員会々々長渡辺驪兄弟の説明のもとに定員会会員の進路が示されたことである。本日に神権を土台にする我が教会にて神権者がより素晴らしい働きをしなかつたら、その土台はくずれさるかも知れない。こうして日本にも定員会が組織されたことは本日に感謝にたえない。私たち神権者の働かねばならぬことをこの定員会説明により、より一層明らかにされた。また第二には証会にて西中央地方部の大半の支部長が日本人会員の中から選ばれたことである。今度の大会は証会に伝道部長が出席されず、別室で一部の会員と面接されている様子で、これはなにごとかあるな

と感じていたら案の定、一時間程して新しい支部長会組織の発表があった。各支部の出席者は起立して今まで働いて下さった支部長に感謝の挙手を行ない、続いて新しい支部長の支持をした。本日に選ばれた支部長たちは全て活潑な良い兄弟たちである。今後は、各支部の会員すべてが支部長に協力して支部の仕事をしなないと、せっかくの日本人の支部長というよろこびをわすれ、支部が混乱するようになるだろう。会員一人一人の教会であることをわすれないようにしよう。

—西中央地方部大会—

学ぶことの多かった
扶助協会大会

秋元富佐 (岡町支部)

アンドラス姉妹が飛行機の中で具合が悪くなり扶助協会に御出席になれないと発表された時は残念に思いましたが、柳田姉妹が代って管理をして下さいました。柳田姉妹は模範的なモルモン婦人としていつも尊敬申上げておられますが、此度この地方部の扶助協会の責任をお受けになり私たちを管理し指導して下さいになり心強くなっ

て嬉しく思っております。この会の最初のお話は名古屋支部の八木沼節子姉妹と云うお若い方でしたが扶助協会の意義や目的について新しい方にもよくわかるようにお話しして下さいました。

次に岡町支部の私たちの代表である阪本晴子姉妹が「頑固であった私が改宗出来たのは私を教えて下さった宣教師への献身的な伝道の態度と強い信仰に感激したからです。私たちも行いよってまわりの人の良い見本とならなければならぬ」とさすが信仰生活十年余のベテランとしての良いお話をして下さいました。それから阿部野支部の美しい女声コーラスを伺いその後で柳田姉妹から各支部の扶助協会についてお話があり支部の活動状況を示す表を作って会場に貼って下さいましたので大変良い参考となりました。

私たちは毎日忙しいと云っておりますが、どんなに身体を忙しくしても、霊的精神的の進歩を心がけ建設的な事に時間を使わなければ怠けていることになる。扶助協会で習いましたが私たちの生活をよくみつめ時間を節約して教会のため扶助協会の有意義な仕事のためにもっと働かなければならないと痛感いたしました。



— 西中央地方部 —

大会に出席して

榊田 彰子 (岡町支部)

場の戸外は雑音と大阪の気せわしきを感じさせる風景だった。でもやはり、伝道部長の力強いお話を、聞いていると、確かに彼が、神様からの導きを受けて、この北部極東伝道部を正しく導いていると言う事を強く感じ、アンドラス伝道部長への感謝の気持ちでいっぱいになりました。私自身、大会に出席して非常によかったと思っております。そしてそこで、神様の御業が、いかに素晴らしい勢いで進められ、神様とイエス・キリストと聖霊が、非常に忙しく毎日私たちの幸福のために、働いていらっしゃるという言葉事実について、再び感じ考えさせられました。

私にとって、大会に出席することは、年行事の一つであり、また最も楽しいものでもある。今回の大会もやはり一カ月程前から、良く準備して喜びで胸をいっぱいにして、出かけたのではあるが、実の所少々がっかりして帰宅した。と申しますのは、さあやろう、やらなければならぬ。と言う心の底からの勇気をその大会で、受けることが出来なかったからである。運悪く天候も悪く大雨であった為かも知れないが、会

会員たちにとって大会に出席することは自分の持っている信仰をもっと強くするために、他の支部の強い会員たちと接する事は、非常に意義のある大切な事であるのもちろんです。求道者たちにとってもこの大会に出席する事は神様とイエス・キリストの存在を知る為に、非常に良い機会だと思えました。今回の大会に出席して、私が一番残念に思った事は、証詞会において証詞をした人々があまりにも不真面目であった事と証詞でなくお話をした人が多かった

事です。たった一分間であっても、心からの証詞であれば非常に強く聖霊の導きによって、聞く人は感激し満服する事でしょう。証詞会の席上において、伝道部長から、各支部の日本人による新支部長さんを発表された時には、神様の御国が強く大きくなっている事を知って喜びで胸がいっぱいになりました。そして確かに現在が末の日であると言う確信をも再びよくしたのであります。この大会の終りに、私の頭の中には、一つの聖句が思い起されました。現世は人間が神に逢う用意をしなくてはならぬ時期である。現世の生涯は、人間が各々働きを遂行せねばならぬ時期である。確かに神様の為に働くのは他の兄弟ではなく、自身自身でなければならぬ。救いの計画に對して再び心から感謝した次第です。



新に召された西中央地方部内
支部長会員

—そのII— 北海道地方部大会



神権者の働き

— 神 権 会 —

神権会はアンドラス伝道部長管理のもとに開会された。各支部から駆せ参じた神権者たちは皆北海道地方部発展の推進力となつている人々ばかりである。話は「最も良き贈物―それは回復された福音」と「神権者は如何に神に愛を示すか」というよく準備されたものであった。その要旨は次の通りである。

完全な福音は、一、キリストの御名によ

り神の御業を代行する権能を人々に認めさせる。二、啓示を通してキリストの御言葉に関する充分な知識をもたらす。三、儀式本来の目的、執行方法を完全に復帰させるに充分な知識をもたらす。四、会員一人一人が確立された権威をもって教会が完全に組織されるよう働く。この四つが完全に行われてこそ真にキリストを理解することができるのであるが、それは回復された福音を通してのみであり、その回復は必ず創立者であるイエス・キリストのみによってなされるのである。回復された福音から永遠の生命を得るのも、失うのも私たち一人一人が心から喜んで受け入れるか、否かによって決定されるのである。私たち神権者は御言葉によって働き終りの日迄、日々の生活を価値あるものにしたいたいものである。

如何に神に愛を示すか。私たちが神に愛を示すためまず第一に、自ら進んで神の業に働くべきである。嫌々ながらするのは神を愛することにならない。積極的に働くならば、善意に基づく小さな誤りは許されるだろう。第二に、神に対する知識を養うべきである。私たちが肉体に毎日規則正しく読事を与える様に、毎日聖典を規則正しく読

むことによって、靈に糧を与えなければならぬ。第三に、神権の恵を隣人に施すべきである。つまり福音をよく理解し宣教することである。また信仰は行動に表われ隣人により影響力を与えるものでなければならぬ。そして私たちは他力に頼らず自力で進まなければならぬ。

最後にアンドラス伝道部長がお話されたが、例によって話術巧みな靈感溢れる話で全員に勇氣と希望とを与えた。言葉は飾りであり行いは真実である。口で盛んに隣人を愛していると言っても実際に何かよいことをしてやるのでなければ、本当に愛したことになる。神を愛する人は誠命をよく守る人であると強調された。

愛について

— 扶助協大会 —

コリント前書十三章をテーマとして司会者の素晴らしい靈的な挨拶は、私たちを自然に大会のヴェールの中につつんで行った。主イエス・キリストは第一の誠命は愛であり第二もしっかりと教えられた。「愛と言うは我等神を愛せしにあらず、神我等を愛しその子をつかわして、我等の罪のために、あがないの供え

ものとなし給いしことなり」とヨハネが言ったように神は常にはかり知れない大きな愛をもって恵み、私たちを導いている。扶助協会は助け合うために神が与え給うた組織である。全扶助協会会長は「貴女はどれだけ多くのものを得たかではなく、どれだけ多くのものを与えたかであり、どれだけ成したかであり、どれだけものを貯えたかではなく、どれだけものを分ち与えたかであり、どれだけ誉を受けたかではなく、どれだけ愛し奉仕したかである」と述べた。これによって私たちは利己的ではなく他人に慈愛を示す事これがイエス・キリストの教えであると気持を新たにした。

また他の姉妹は「青い鳥を探し求めるように歩いた自分は、このテーマの聖句に感謝している」と話した。対人関係に最も適した教えであり、私たちは教えに忠実である時それが真理であると証詞するのである。教会に入った現在幸福である事を心から感謝していると、自身の経験を通して話した。もう一人の姉妹は、母の愛がいかに必要であるかを話した「時代の変化にかかわらず愛は永遠に変わりない。家庭の中に

あって、母の愛が欠けるとき平安を保ち得るであろうか。山を動かす程の信仰があっても愛なくば数うるに足らずと、主イエス・キリストは戒めた。私たちは愛の精神を失わず神の娘として喜び迎え入れるような人格を築こうと強調した。」

最後にアンドラス姉妹は「神の誠命によって組織された扶助協会は実に素晴らしい団体であって扶助協会の目的は、証詞を強くすることである。会員は御霊に満たされて家庭を正常なものにすることに努めなければならぬ。また神権者を助けて行くことも必要なことである。会員は教会の集会で話し合をしてお互のはげましを受けることが出来る。そして心に平安を保ち天父なる神様は私たちの実践を心から希望している」と述べた。

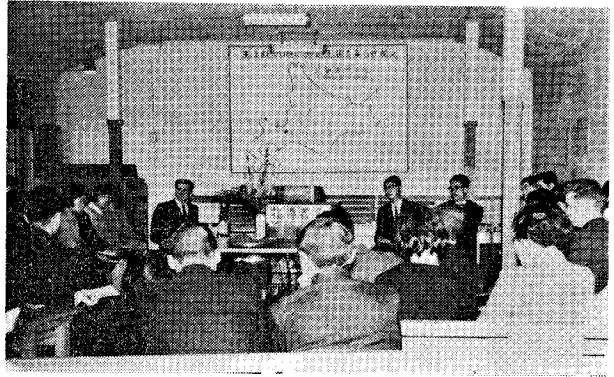
集ったすべての姉妹たちは実践と小さき灯をともして多くの人に真の教えの導き手となり光を放とうと決心した。

エゾ地に栄え行く

北海道地方部モルモン大会

指導者会

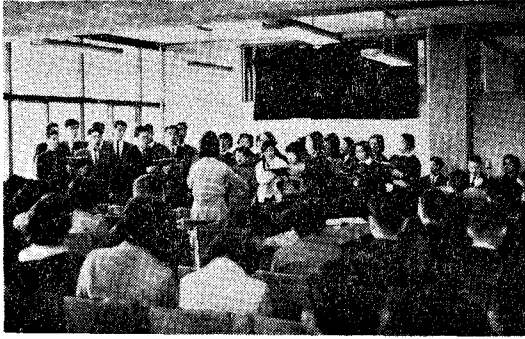
北国の春の気配に、冬眠からようやく目



覚めた熊が、希望に胸ふくらむ思いで巣立つごとくに、四支部の指導者は懐しく相まみえた。

会場正面に大きくはり出された北海道の地図は、目立って札幌、小樽、室蘭、旭川のシオンの地を示し、中央に活けられた麦の穂花とソルトレイタ谷の盤景は、ブリガムヤング

が「正にこの土地なり」と宣言した当時を想い起させてひと際印象深く、兄弟姉妹の熱意の程が伺われる。ふり返ってみると春秋の地方部指導者会はきまって各支部内に於ける当面の諸問題の討論に終始したが、今大会の指導者会に一段の飛躍が見られたことは真によろこばしい思いである。各指導者もはや支部内のみならず、末日にそなえて広く世人の指導者とならねばならぬ



と、北海道に於ける将来の希望と抱負を力説して、鮫島邦彦兄弟（札幌）は出席者一同の心を動かした。この広大な北海道に於いて道南の一部がシオンの色につつまれているに過ぎない。モルモンとしての喜びを自分一人占めにすることは、はたして神の御意であろうか。常に神の真の教会にあるという確信は人類の救いの為に御意を行う働き手となるよう使われねばならない。そしてこの若い北海道には我々が責任と義務とを心に銘記し遂行することによって破竹の勢で成長する偉大なる可能性がある。この大きな可能性を有する北海道にあって、我々指導者の心中に人しれぬ力と息吹きを感じずにはいられない。

証 詞 会

本年度初の三月大会証詞会は午後二時より約二時間にわたり室蘭支部の姉妹をトップに力強い証詞が述べられた。室蘭支部の会員や学生の活発な証詞が今大会の特徴であった。次に各支部会員の印象的な証詞を記しましょう。

* * * * *
教会なくして正しい道はありません。私

私たちは何時どこにいても祈りは大切です。祈りなくして生きることは出来ません。祈りがなくなつた時に信仰は薄くなります。その時に兄弟姉妹の愛の手が必要で少し私は今までに何度かサタンの誘惑に会いましたがその度に兄弟姉妹に助けて頂いたことを感謝しています。
（小樽支部）

* * * * *
私は聖餐式に臨むときキリストの尊い犠牲を思い「父よ彼らを赦し給え。その為す所を知らざればなり」という聖句を考えます。キリストの愛が大きいのなら神の愛は如何ばかりに大きいかと思えます。全人類が神さまの福音に従うなら沢山の人は神さまと住む機会があることを信じます。福音を実践する人のみ神と共に住むことが出来ます。我が教会の聖典は全て真の神の御言葉であると心から証しいたします。
（室蘭支部）

* * * * *
彼らの素晴らしい神への確信は永遠に消えることのない灯となつて末日の世を照らし続けることを願っています。

五人の大神権者誕生

大会が開かれる毎に今度は誰が大神権を獲得するであろうと全会員の興味の的であるが今回は五人もの大神権者が誕生することが発表された。会員の強い支持と彼らのたゆまざる努力に晴れの栄冠が頭上に輝いた感激の一瞬であった。末日の世には大神権者が地上に満ちあふれると言う。今年度より年に四回大会が開かれるようになった。神の王国を建設する為に一人一人の働きが必要とされている。いと高きものに向かって前進する努力を怠らぬよう共に励みましよう。

地方部扶助協会

会長召される

新しく組織された地方部扶助協会会長に札幌支部で五十余年にわたり強い信仰生活を送ってこられた経験豊かな熊谷たまの姉妹が任命されたことは北海道扶助協会の発

展に大いなる功績を残されることと期待しています。



した。」

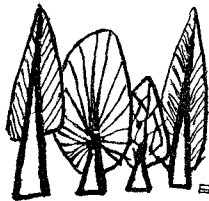
札幌支部初の会員による支部長会組織される

今後益々発展の途上にある北海道の中心部、札幌支部に日本人の四人の長老たちにより支部長会が組織され証詞会の席上、伝道部長より感動的な発表があった。支部長には長い間第一副支部長として忠実に神の御業を為さんと努力された柳沢俊雄兄弟が聖任された。第一副支部長には若さと才能豊かな松下泰洋兄弟、第二副支部長には藤

田秀光兄弟、書記には児島克己兄弟が任命された。会員の絶対的な支持により支部長となつた柳沢兄弟は次のような抱負を述べられた。「世の人々はこの様な責任につくことは名譽なこと考えて居ります。もちろん私も支部長となりその様に考えますがそれ以上にこの責任の重大さに身のひきしまる思いがします。キリストは『我は道なり。真理なり。生命なり。我によらでは誰にても父のみもとに至る者はなし』といわれま

〈地方部扶助協会会長〉

した。」



「回復」の教義（二十四）

佐藤 竜 猪

回復の計画は神の正義から見て必要である

「アルマ書」四十一〇—

一、「回復」(Restoration)の必要

背教によって福音の原則の正しい解釈が行われなくなり、福音の儀式を執行する権能が失せ、「永遠の誓約」が破られるに至って、イエス・キリストの真の教会とその真理と、先の「神権時代」の予言者たちが保有していた神権の鍵と権能（「聖徒の道」一九六〇年六月号参照）と、更に昔の人々に与えられたが破られてしまった「永遠の誓約」（イザヤ書二十四〇五参照）とを「回復」しなくてはならなくなった。そのためには天が開かれて神の前から天の使者が天降り、この地上に於て神の御業を行うために選ばれた人々に神権を授けなくてはならない。

すなわち、先の時代の聖徒らが組織して

いたイエス・キリストの教会の教えが背教によって全く異つたものになつてしまつたから、天が開けて主が親しく語りたまひ、

主の口と古代に於ける主の御弟子の口とによつて、失われた真理を「回復」するほからはなかつた。背教によつて、主の御名によつて行う権能はこの地上から取り去られてしまつていた。すなわち黙示者ヨハネが示現の中で見たように、イエス・キリストの教会が荒野の中へ追いやられていた間に、神のみもとにこの権能は引きあげられていた（黙示録十二〇一—十七参照）。この権能、すなわち神権が地上の人々に「回復」される道は唯一つよりほかにない。それは天が開かれることである（「救いの教義」第一巻、百六十七頁、第三巻八十七・八十八頁参照）。

二、アロン神権の「回復」

千八百二十九年五月の十五日、予言者ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの二人がベンシルベニヤ州ハートモニーの或る森の中へ退いて教えを授けたまふと祈つたとき、一人の天の使者が光の雲に包まれて天降り、われは新約聖書の中でバプテスマのヨハネと呼ばれているヨハネと同一人であると名乗り、またわれはメルケゼデク神権の鍵を握るペテロ、ヤコブおよびヨハネの指示によつて働く者である、この世の事に關わる福音の鍵を握るアロン神権をジョセフとオリヴァに授けるために遣わされた者であると言つて、その手を二人の頭に按おさじて次のように宣言した。

「汝らわれと同じ業に働しごとけ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。こは天使の導みきと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適あひて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし」と。

この天の使者は神権を授けてから、ジョセフとオリヴァに水の中に下りて行つて互いにバプテスマを授けよ。バプテスマを授

け終つたら互いに按手をして、われが汝らに授けた神権を再び授け会えと命じた。この言葉に従つて二人は水の中へ下りて行き、ジョセフがまずオリヴァにバプテスマを施し、次にオリヴァがジョセフにバプテスマを施した(「教義と聖約」第十三章、「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」六十八頁(英文)参照)。それからジョセフは両手をオリヴァの頭上に按いて彼にアロン神権を授け、次に彼が両手をジョセフの頭の上に按いてジョセフと同じくアロン神権を授けた(「ジョセフ・スミスの見神録」二十三頁参照)。

三、バプテスマのヨハネが遣わされた理由
アロン神権を授けるためにバプテスマのヨハネが遣わされたわけは、第一にその当時この地球上にその神権の鍵を保有している人間が一人もなかったからである。黙示者ヨハネはバトモスの島で受けた示現の中で、神権が天に引き上げられるのを見た(黙示録第十二章参照)。この黙示の言葉の中に「ひとりの女」は教会を表わして居り、その女の産んだ「男の子」、「鉄のつえをもつてすべての国民を治めるべき者」は神権を表わしている。「この子は、

神のみもとに、その御座のところ、引き上げられた」(黙示録十二〇五)。千八百二十年には、この地球上にただ一つも神の真の教会が存在せず、また神権を保有しているとして正当に主張することのできる教会は一つもなかった(「ジョセフ・スミスの見神録」五頁参照)。人間の力では神の真の教会を創立することはできない。また神は人間の定めた規則ででき上つた組織である教会を、神の真の教会として受け入れたもうはずがない。神権の鍵と権能とを具えた真の教会が「回復」されるには、天が開けて神の御前から天の使者が遣わされるほかにないのである(「救いの教義」第三卷、二七一頁参照)。

第二に、「主の道を備える者」(ルカ伝三〇四参照)として人々に導きと教えを施していた当時、バプテスマのヨハネはアロン神権の長たる権能を保有していた。ヨハネはレビ人であつて、アロン家の血筋を引いた男子であつたので(ルカ伝一〇五参照)、「アロン神権の管理祭司」であつた(「救いの教義」第三卷八十九頁、「教義と聖約」八十四〇二十八参照)。

神の王国には完全な秩序があつて、神は

その僕たちの保有する権能を認めたまう。こ
ういうわけで、ペテロ、ヤコブおよびヨハネの指示によつて働くバプテスマのヨハネが、ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリの所へ来て、イエス・キリストの真の教会が異教化し腐敗してしまつていた当時、すなわち「時の絶頂、もしくは時の真中の神権時代」(「聖徒の道」千九百六十年八月号参照)に彼の保有していたアロン神権の鍵と権能とを「回復」したのである(「救いの教義」第三卷八十九、九十頁参照)。

四、メルケゼデク神権の「回復」

バプテスマのヨハネはジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリにアロン神権を授けた時に、「自らはメルケゼデク神権の鍵を握るペテロ、ヤコブおよびヨハネの指示によつて働く者である。このメルケゼデク神権も時至らば」ジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに「授けられ」と告げた(「ジョセフ・スミスの見神録」二十四頁参照)。

この事があつてから間もなく(「末日聖徒イエス・キリスト教会歴史」六十九頁(英文)参照)、もしくは千八百二十九年五月十五日から六月の下旬までの間に(「教義と聖約の註解」六十九頁(英文)参照)、ジョセ

フ・スミスとオリヴァ・カウドリはペテロ、ヤコブおよびヨハネの手からメルケゼデク神権を授けられた。

授けられた場所などに就いては「教義と聖約」第二百二十八章、すなわち千八百四十二年九月六日附イリノイ州ノーヴー発信に關わる予言者ジョセフ・スミスの書簡の中に「王国の鍵と時満ちたる神権の時代の鍵を有つと自ら宣言せる、サスケハナ郡ハーモニーとブルーム郡コーレスヴィルの間なる荒野の中サスケハナ河のほとりに於けるペテロ、ヤコブとヨハネの声」とあり、また「教義と聖約」第二十七章、すなわち千八百三十年八月の啓示の中には「汝らを聖職に按手任命し汝らの使徒たること、また汝らが導きと教を施す働きと、わが彼らに啓示せるところと同じものとの鍵を有つことを確認せしめたるかのペテロ、ヤコブヨハネの三人」という言葉があつて、メルケゼデク神権がペテロ、ヤコブおよびヨハネの三人によつて、サスケハナ河のほとりでジョセフ・スミスとオリヴァ・カウドリに「回復」されたことを証している（「救いの教義」第三卷九十八頁参照）。

五、福音の「回復」

福音が始めてアダムに与えられて以来、背教によつて失われた福音がまた人間に与えられる度毎にそれは福音の「回復」であつた。例えば、主は在世の当時、始めアダムに啓示したと同じ「救いの計画」、すなわちもとのままの福音を「回復」なさつた。

しかし、現在言われている福音の「回復」は、「万物の回復」の一環であるところの「最後の大回復」のことである。「現在の神権時代」は、古代の予言者たちがすべて待ち望んでいた「回復の時代」である。この時代は「神が聖なる予言者たちの口を通して、昔から予言しておられた」万物回復の時代（The times of restitution of all things）である（使徒行伝三〇二二一参照）、（ブルース・R・マッコンキー長老著「モルモンの教義」五七〇頁参照）。

黙示者ヨハネは、福音の「回復」を見先して「わたしはもうひとりの御使が中空を飛ぶのを見た。彼は地に住む者、すなわちあらゆる国民、部族、国語、民族に宣べ伝えるために永遠の福音をたずさえてきて、大声で言った」（黙示録十四〇六・七参照）と誌している。

この「回復」の天使は、「回復」が完成されるために起るいろいろな出来事にたずさわる多くの天使を一人で表わしているのである。すなわち、モロナイは眞の福音の誌してあるモルモン経を再び世に現わす（回復する）ための働きをして、ヨハネの言葉は事実となつた（「教義と聖約」百三十三〇三十六・三十七参照）。またバプテスマのヨハネ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、ミカエル、ラファエル、ガブリエル、エライヤス、モーセ、エライジャそのほかのいろいろの天使が現われ、福音が世の人々の間に施されるよう神権の権能と鍵とを「回復」して、ヨハネの言葉は事実となつた（「教義と聖約」十三、二十七〇十二十三、八十八〇百三・百四、百十〇十一一十六参照）、（ブルース・R・マッコンキー長老著「モルモンの教義」五七一頁参照）。

福音の「回復」が完成されるためには、いろいろなことこの「回復」が行われなければならないが、中でも次のようなことの「回復」が必要である。

(一)福音の知識。人はイエス・キリストの眞の福音を知らずして、完全な「救い」すなわち日々の栄の最高の天界に入つて「永遠の生命」を得る道を履み行うことはできない。

い。すでに、完全な「救い」に必要な福音の知識はモルモン経、「教義と聖約」にあらわれた啓示、みたまの現われ等によって「回復」されているが、更に多くの福音の知識がこれからも啓示されるにちがいない（信仰箇条第九条、「教義と聖約」百一〇三十二―三十四、百二十一―二十六―三十二、百三十二―六十六参照）。

(二) 天の開かれること。千八百二十年の春、父なる神と御子イエス・キリストが親しくジョセフ・スミスに現われたもうたことによつて、それまで地を覆うていた「暗黒の」とばり」は破れ、以来数々の示現や啓示が与えられている。

(三) 神権と種々の鍵。人間に完全な「救い」、すなわち日の栄の最高の天界に入つて「永遠の生命」を受けさせるに必要なすべての神権と鍵は「回復」されて末日聖徒イエス・キリスト教会の保有するところとなつている（「教義と聖約」十三、二十七―三十一、百十―十一、百十六、百二十八―三十一、二十一参照）。

(四) エライヤスの来ること。この偉大な予言者は「末の世に關し世の始めよりすべての聖なる予言者たちの口によりて告げられた

る、かのすべてのものを原に復す鍵」（「教義と聖約」二十七〇六、七十七〇九、四十四、五、旧約聖書中の「エリヤ」、マタイ伝十七〇十一、マルコ伝九〇十二参照）を保有する予言者であつて、これらの鍵はすでに「回復」されてあり、まだ啓示されていないところは「時期至らば」明らかにされるにちがいない（「教義と聖約」百三十二―四十四―五十五参照）。

(五) 聖霊の賜。人が聖霊から親しく、その導きと恵みをいただくことのできる権利は、教会の会員であることを「確認」された者と与えられる賜である（「聖徒の道」千九百六十年九月号参照）。メルケゼデク神権の権能と鍵とが「回復」されたことによつて、再びこの賜を授けることが可能になつた。のみたまの賜。聖霊の賜に關聯して約束された或る特別な賜、すなわち啓示や示現を受ける賜、奇蹟や医しを行う賜、異言の賜などをみたまの賜（Gifts of the Spirit）と呼ぶことがある（ブルース・R・マッコンキー長老著「モルモンの教義」五七二頁参照）。これらの賜は常に忠実な教員に豊かに与えられ、福音がすでに「回復」されたしるしとなつている（マルコ伝十六〇十六

―二十参照）。

(六) 眞の教会と神の王国。眞の教会は千八百三十年四月の六日、神命に従つて創立され、千八百四十四年の四月頃までには組織が完成して神の王国である眞の教会が全く「回復」された（使徒、予言者、そのほか教会の諸役員たち）。

「神は教会の中で、人々を立てて、第一に使徒、第二に予言者、第三に教師」としたもうた（コリント前書十二―二十八）。これらの役員、またそのほかの役員たちは（エペソ書四〇十一―十四）、「救い」を得るためにその人々の指導を必要とする教員があるかぎり、眞の教会にはいつもあるはずである。

(七) イスラエルの集合。
(八) 神殿の諸儀式。

(九) 「シオン」の贖い。「教義と聖約」百三十三―二十九参照、ミズーリ州ジャクソン郡には「新エルサレム」すなわち「シオン」が建てられるはずである。この光榮ある事業が完成するとき、すなわち「古えのシオン」を「回復」するための準備が全くとのつた時である。そして、東西両半球に一つずつの「シオン」すなわち「新エルサレム」と旧「エルサレム」とが完成したときイザヤの予言（イザヤ書二〇三）が成就するのである。（ブルース・R・マッコンキー長老著「モルモンの教義」五七三頁、七七四頁参照）。

5月14日

母の日に

おくる二題

母について

塩 隆彦

(前合支那)

私は母について何か書くよう原稿の依頼を受けたとき、ほんとうに何を書いたらいいんだらうと困ってしまいました。なぜなら母はあまりにも身近すぎて、また、母の働きがあまりにも大きいため、その日常の働き、そしてそれに対する感謝を忘れがちなことから

です。

考えてみると、日常の母の働きがいかに多く、そして重大であるか、ということがわかると同時に、大変だなあと思えます。ことに私の家は家族が多いので、三度の食事の用意とかたづけ、洗たく、そうじとこれだけでもうほとんどの時間がとられます。洗たく物が裏庭いっばいに干されているのを見ると、大抵の人はその量の多いのに驚いてしまいます。その他買物もあるでしょう。また、私には少しからだの不自由な祖父がいるのでその世話も大変です。このような肉体労働の



ほかに、家の大蔵大臣としての一家の切り盛、四季の衣食住の心配、家族が病氣した時など、いろいろ心配は絶えません。私はこれらの大仕事を毎日毎日繰り返し続けている母に敬意を表し感謝せずにはいられません。ほんとうに毎日の母の働きがあつてこそ日々を心配しないで生活することができなのです。母が疲れて病気になるたりして自分たちでそれらの仕事をしなければならなくなつたと、はつきりと母の働きと家族に対する奉仕の大きさを感ずるのです。こう思っているながら十分に母の手伝いをす



(隆彦兄弟)

ることのできない自分を恥ずかしく思っています。

私の母はわりに丈夫でわりに頑固で忍耐強く、とても同情深い性格を持っています。私の家族は引揚者だったので、終戦後非常に苦労したそうです。その時代のことが現在の母に大きく影響したのだと思います。そして戦時中や終戦後のいろいろな苦勞を聞くとき敬服せずにはいられません。でもいくら丈夫でも長年の疲れが出てきたのかこのごろは少し弱ってきたように思われます。それで私はいさるだけ母の負担を少なくし心配をかけないように努めようと思っっているのです……。

私が一番母に感謝していることは私を眞の教えに導いて下さったことです。私は小学生の時、父と弟とともに兄からバプテスマを施されましたが、年若くしてこの素晴らしい福音を知ることができたことを心から感謝して

います。私たち家族を眞の福音に導いて下さったのは母でした。今では家族八人のうち七人が会員になりました。しかし、現在の家庭は本当にモルモンの家庭と呼ぶことはできないと思います。でも私たち家族が懸命に努力し協力し合うことによって、素晴らしい幸福な家庭を築くことができると確信しています。

私は母がいつまでも健康で家族とともにひとつもつと進歩してくれるようにと心から祈っています。

(学生・十六歳)



(お母さんの千鶴子姉妹)



僕の母

上野山寿樹

(岡町支部)

僕の母は一口にいえば大変厳しい人だと思えます。教会の教えを行うにしても家庭での生活でも、少しでも間違ったことや世間では大してとがめないような小さなことでも、それが教えに反したことであれば絶対に許しません。僕や兄たちもいつもそんなことで母に注意されます。それで僕も時々腹を立てたりしますが、母にはまた、一面とてもやさしい所があつてよく僕たちの世話をしてくれました。

母は一九五七年三月二十九日に、みのをの清流において父と共にバプテスマを受け、それいらい特別な事情(病氣など)がないかぎり、毎週教会に行き神の教えを学んでいます。そして現在の子供の日曜学校の責任者をして毎週日曜日は僕たちより先に教会に行きます。僕は父からよく母のことを聞きます。

それは戦争中や戦後の混乱した時代に父の仕事が思わしくなくて家族が大変困った時。絶望しそうな父をいつも母は励ましつづけてまだほんの小さかつた僕や小学生の兄たちの



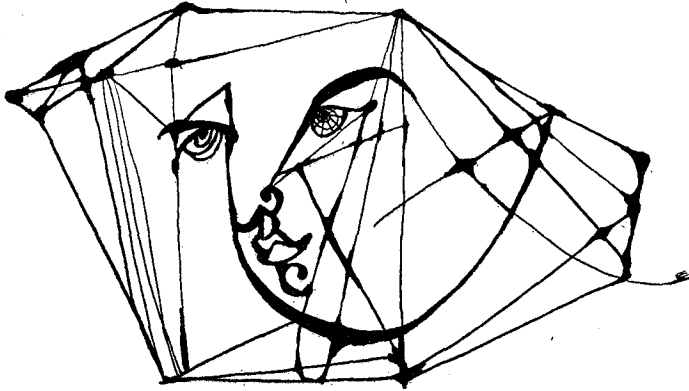
(寿樹君(中央)と家族)

世話をしながら、食糧の買い出しや不足勝ちな衣服の世話をしてくれたそうです。父はよくその頃を思い出し、「もしお母さんが力づけてくれなかったら、どんないやな思い出を残したか知れない」と言っ母に感謝しています。また、僕が友だちから遊びのさそいなどを受けて教会に行くことをしぶったりすると、母はきびしく叱ります。そんな時、僕は少しうらめしくなりませんが、いつも家族のために力一ぱい働いてくれたる母の姿を思うと、自分の気ままな心を反省します。

僕の家は経済的にあまり豊かではありませんが、母はその豊かではない家計の中から、色々と工夫をこらして食事に気をくばって、僕たちの健康に注意してくれます。家族がい

つも仲よく楽しく、日々を暮すことができるのは、神様のお恵みと母の大きな愛情によるものです。これからは母を助けて、一そう楽しく生活できるようにしたいと思います。

(学生・十五歳)



私の体験と証詞

水村真由美

私は、今こんなに幸せでいいのだろうかと思つた時、恐ろしくさえなります。今にもこの幸せが崩れていってしまう様な気がしてしまいます。

四年前、「この心臓の状態ではもう……」とお医者様から匙を投げられ、否応無しに死を覚悟せざるを得なかった私でしたが、今こうして歩くことが出来、まがりなりにも家事を手伝いまた教会迄くることが出来るようになりました。

私は病氣して本当の幸せ、生きることを幸せを知りました。

生きられないとわかった時、恐れと後悔とでどうかなってしまいそうでした。まだまだ生きたいことがいっぱいありました。まだまだ生

きるつもりで先にのぼしていたこと、与えられていた健康にも、その他の色々のことにも何一つ感謝せず、不満を見つけ出しては不平を言っていた日々を本当に後悔しました。

そして死は恐怖そのものでした。でも「これだけで死にたく無い」と言う生へのしゅう着が残っているかぎり恐怖から逃れられないことを感じたのです。その時、神様の前にたてるだけの自信がどんなにほしかったでしょう。もう今となっては自分が怠けていたのだから仕方が無いと諦めました。

この時始めて心から神様に呼びかけた気がします。それ迄ただ教えられ導かれていたにすぎなかったのが自分から求める神様に変りました。

でも、それからの数年、つい半年程前迄の田々はあまり良いものではありませんでした。いつ治るのか、果して床から離れる日が来るのか、保証されていませんでした。もう今の苦しみから逃れるには自殺より無い気がしてきました。もちろん自殺の悪いことも、そんなことをすれば神様のみもとにいけなくなることも知っていました。でももう少ししたとえ間違った勇氣だとしても勇氣があったら私は自殺していただしよう。

今やつと病気に費やされた才月を考えた時、「それが全くの無駄にはならなかった」と考えることが出来るようになりました。少くともこれからの人生を、私はいつくしみ暮らして過していきます。

一日一日が意味あるものとして感じられる



のです。今迄あたり前のこととして受けてきたことが楽しさと喜びとそして幸せをもたらしてくれまます。

そして何より幸せなこと、これから生きていく上での大きなささえを見出したことです。

与えられた宗教で無く自分から求め見出し

たもの、私はこれを大切にします。教会につどう一回一回によって身心共に成長していく気がします。そして私は毎夜「どうぞこの次も教会につどうことが出来まます様に……行かれるだけの力をお与え下さい」と祈ります。

バプテスマも、タマサカ長老、オフムキニ長老、兄弟姉妹の方々の力強い信仰に満ちたお言葉にささえられて無事受けることが出来ました。もしこれらの方々の暖いはげましの言葉がなかったら、信じまかせざることの出来なかった私は、怖れで受けることは出来なかつたでしょう。この感謝の気持をどう言い表わしていいかわかりません。

バプテスマによって生まれ変わる事が出来たこと、そして再び健康をとり戻しつつあることを思うにつけ私は神様の深いお恵みをひしひしと感じます。

これから先、私は神様の示し給うた道を一生懸命歩んでいきたいと思っています。私は今誰に対しても末日聖徒イエス・キリスト教会は真の神の教会であることをあかしする事が出来まます。

すべて、イエス・キリスト様の御名によって申し上げました。
(静養中二十三歳)

人を漁る者たち

エラ・編集部員がえがく
3人の新12使徒会補助

人々の間の指導者

ナタン・エルドン・ターナー社長

エラ編集員 ジョン・G・キンナー

(エラ編集員とは当教会の機関誌インプルヴメント・
エラの編集員のことである)



<ナタン・エルドン・ターナー>

ガリラヤ湖畔において早期に救主がその弟子たちを召された時次のように言われた。

「我に従いきたれ、さらば汝らを人を漁る者となさん」
(マタイ伝四・十九)

これはすべて彼に従う者へのお召しの言葉である。昔と同様に最もよくこの人を漁る者への召しを聞く人々は教会

人を漁る者たち

においてまたその人格完成において人々の指導者となるのである。一九六〇年十月八日の末日聖徒イエス・キリスト教会の秋の総大会で十二使徒会補助に召された、ナタン・エルドン・ターナー長老はそのような人である。

ターナー長老の人生が教会の内に在ってもまた外においても成功であったことは、その素晴らしい記録によってわかる。高等学校の教師から身を起して資本三億弗(約三百六拾億円)のトランスカナダ・パイプライン会社の社長となったことは彼の勢力と努力の一面を物語っている。彼が最初はこの会社の長としてトロントに行くことを彼の教会におけるステーク部長としての責任を果せないとの理由で断つたことは彼の主の仕事及び福音を愛する中実さと献身を充分に証明するものである。

ターナー長老は一八九七年にユタから南アルバータに幌馬車で行った。ナタン・ウイリヤム・ターナーおよびエドナ・ブラウン・ターナーの息子として一八九八年五月九日、ソルト・レーク市に生れた。彼の母は彼の生れた、ソルト・レーク市に戻ったのであった。彼が生れてわずか数週間後彼女が赤ん坊の彼を伴ってカナダに帰ったのである。その時から彼はそこで育ったのである。一九三五年に彼は、アルバータ、カードストンの学校の校長を止めてアルバータ立法部の選挙民代表者となった。彼は家屋の代弁

者に指名され一年後に、土地および鉱山の代行者に任命されたのである。一九四九年に彼は二つの新しくつくられた部門すなわち土地森林部、および鉱山鉱物部の代行者に任命された。それに加えて彼はアルバータ調査評議会の会長をも務めたのである。

一九五二年にターナー長老はその政治的活動を止めて、メリル石油会社の社長になった。一九五四年に彼はトランス・カナダ導管会社の社長となった。この会社はアルバータから、クエベック迄約二千二百哩の天然ガス管を建設する為に設立されたものである。一九五九年に彼はその社長の地位を退いたが、今日でも重役会にその名をたらねているのである。その上彼はナショナル信託、トロントドミニオン銀行、輸送路調整会社、インランドセメント会社メリット石油会社などの重役をも兼ねているのである。彼はまたメリット石油会社および地方生産導管会社の社長である。彼は一九五九年から六十年にかけてのカナダガス協会の会長であった。

ターナー長老の教会への奉仕また、市民としての奉仕も同様に充実したものであり、より立派な功績を留めて彼の経歴を輝かしものとしているのである。いろいろの職に就いたが彼は一九三二年から三五年迄の三年間、カードストン第一ワード部の監督を務め、一九三八年から五二年迄の十二年間西カナダ伝道部の、エドモントン支部長を務め一

九五三年から、六〇年迄の七年間カルガリストーキ部長を務めたのである。

ターナー長老夫妻が五人の子供たちを伴ってエドモントンに移って来た時エドモントン支部の会員は十五人から二十二人にふくれ上がったのである。そして彼がカルガリに移る頃には五百人以上の会員に増大し、エドモントンLDS教会が建てられたのであった。またアルバータ大学、LDS学会が設置されたのである。

彼がカルガリ、ステーキ部長を務めている間にその会員数は一九五三年の約二千人余りから一九六〇年の殆ど四千人近くまでに増加したのである。

ターナー長老の定めたことを完遂する才能はその個人的な生活にも反映している。彼はサラ・イザベル・メルルを始めてほんのちらっと見ただけで正式に面接もせず既に彼の仲間に、何時か僕は彼女と結婚すると言ったのである。

一九一九年にターナー長老はサラを愛する妻として迎え、一九二三年にアルバータ神殿で結び固められたのであった。彼らは五人の愛らしいお嬢さんを持っており、皆結婚して、二十二人のお孫さんに達している。ターナー長老の三人の姉妹及び二人の兄弟はソルト・レーク市に住んでいるが直系の子孫たちは皆カナダに住んでいる。

ターナー長老はロータリー・クラブを含めて七つのク

ラブおよび奉仕団体に加入している上に、彼はゴルフが好きで、カルガリ・ゴルフ・クラブの会員でありまた、カルガリ、商工会議所の会員にもなっているのである。彼はアルバータ・ボーイ・スカウトの理事として八年間（一九四五—一九五三）務め、また終身会員として、銀狼賞を受けたのである。彼はボーイ・スカウトのボタンをつけてこの大いなる機関の支持者たることを示している。彼はアルバータ大学理事会の一員であり、一九五六年にブリガム・ヤング大学の法学博士号を授与された。彼の教会におけるまたは個人的な生活面における成功は絶体的な廉直、正直、大胆さによっているのである。彼自身の成功の哲学は、何事でもなすべき価値あることは立派になす、と言うことである。彼の教会に対する奉仕は、平衡を保った車輛でありまたその生活を支配するものではあったが彼はまさか十二使徒会補助に召されるであろうとは夢想だにしなかった。けんそんな彼の教会奉仕態度は彼が今回の地位に新しく任命された時の次のような挨拶によっても、よく伺われる。

「私は、教会幹部、マッケイ大管長及びその協力者たちによって、私をこのような高い地位に召すことに示された信頼に対し心から感謝します。能力なくてはいかなる人もこの地位に召されることはありません。私は私の全心を以て主を愛していると申し上げたい。そして私は私の全心全霊また全力を尽して主とあなた（マッケイ大管長）に仕える

ことを誓います」。
だいたんに神の御言葉を伝える人
フランクリン・ジュイー・リチャーズ

エラ編集員 カーター・E・グラント



<フランクリン・ジュイー・リチャーズ>

「我が兄弟姉妹よ、我々の持っている最大なるメッセー
ジは、救への神の能力、イエス・キリストの福音は回復さ
れたと言うことであることを私は皆さんに証します。」

一九六〇年十月八日、十二使徒会補助に支持された後、
フランクリン・D・リチャーズ長老は一般大会に於て、こ
のように宣言した。彼は更に次のように証した。

「私は神が生きていること、イエスは誠にその息子であ

り世の贖主であり、ジョセフ・スミスは神の予言者であ
り、我々の聖なる書、教義と聖約に含まれている主の言葉
によればかつてこの地上に生きた者の内で最大なる予言者
であることを知っております。また私はデビッド・O・マ
ッケイ大管長が今日の主の予言者であることも知っており
ます。私は全心全力をもってマッケイ大管長を支持しま
す。私はイエス・キリストの名によりこのことを申し上げま
す。私自身を教会に捧げます。アーメン」。

何と厳肅な献身であろう。私はこの新任の十二使徒会
補助が他の教会幹部と共に任命された地位に着くのを見守
っていた時、このように自分自身にささやいた。この挨拶
の中で彼はまた次のように言った。

「私は今朝、マッケイ大管長、あなた並びにその他神の
王国を司る私の兄弟たちに対し深い愛を持っております。
また私の仲間をも深く愛しております。私は心から、いか
なる人に対しても敵意を持っておりませんと言うことが出
来ます。私は個人的に全くその任にふさわしくない者であ
ると感じておりますので主がこの地位を支持して下さるよ
うに祈っております。」

リブランド・リチャーズ長老も、この大会で彼とフラン
クリンは同一の祖父、モルモンの開拓者で五十年間十二使
徒の職を務め晩年において十二使徒会長となった。フラン
クリン・D・リチャーズを持っていたと述べた。更にリチャ

トズ長者は次のように言った。

「彼は結婚してから十四年目迄の内の十年間をその家庭を外に伝道の地に暮らしたのであった」と。

祖父リチャーズから今日この二人の孫および回復された神の王国を伝える勇ましい多くの子孫が出ていることは不思議なことではない。

フランクリン・D・リチャーズ兄弟姉妹たちのお子さんを訪ねて私は御長男のフランクリンはウルグワイに伝道し、デビッドはメキシコと中央アメリカに伝道したことを知った。「子供の頃から両親を敬い兄弟仲よくするように育てられて来ました。私たちはまだ幼い頃にお父さんが食事が終わった後片付けをするのを手伝うようにしつけられ、お父さんが皿を洗い私たちがそれを拭いている間、お父さんの東部諸州における若い伝道時代の面白いお話をしてくれました。これらの話まだ多くの信仰を強める経験談は、私たちの家庭に少くとも男の子たちは伝道に出なければならぬと言ひ意識を強めたのであります」と彼らは口をそろえて語った。

心を漁る者たち
彼らのお父さんの家庭における信仰と祈りについての質問に答えて年長の娘さんは、幼少の頃から家族の祈りとベットの祈りは彼らの生活の根底であったことをよく記憶していると答えた。彼らはまた家庭において常に聖書とモルモン経を読み安息日には規則正しく

日曜学校と聖餐式に出席したと報告した。

「私たちの家庭での最初の灌油の儀式の経験は、このデビッドがまだ四才か五才の頃で、彼は急性肺炎で何日間も重態に臥していました。私はほんとに心配していたこともよく覚えております。ある夜、おじいさんのチャールズ・C・リチャーズとお父さんまたお母さん私たちもみんな床の方に跪いて彼に祝福を与えました。その時から彼の呼吸はかるくなり急速に回復しました。この経験は私たちの家庭に影響し、特に私たちの家庭に病人が出来た時に強く影響しました。

この家族の父であるフランクリン・D・リチャーズは、一九〇〇年十一月十七日、ユタ州オグデンにおいてチャールズ・C・リチャーズとレティーシャ・ピリー・リチャーズとの間に生れた。早期の教育をウエバー私立中学をも含めて彼は郷里の町で受けた。そこで彼は州立高校討論会の一員として現ブリガム・ヤング大学のエルネスト・L・ウィルキンソン総長とも討論仲間であった。フランクリンはウエバー私立中学の刊行物、アコールン・アンドウエバー、ヘラルドの事務主任として学生間に知られている。この時に彼は全学生によって愛し尊敬されている学士会長のデビッド・O・マッケイと知己となったのである。

フランクリンが東部ステイト伝道部で働らいていた若い時にブルクリンおよびボストン大会の会長に選ばれた。そ

人々を漁る者たち

の時、教会の祝福師、ハイラム・G・スミスがその伝道部を訪れ、リチャーズ長老に祝福師の祝福を与え、彼が聖なる活動及び市民活動の両方に指導的役割を果し幹部の職に召されるであろうと宣言した。

一九二三年にフランクリンはユタ大学の法科を卒業して法学士の学位を受取った。在学中に彼は最も好きであったヘンリー・D・モイル教授と親しくなり、その友情は幾年も続いたのである。一九二三年八月一日にフランクリンはソルト・レークの神殿で、ヘレン・カーネスと結婚した。

リチャーズ長老は弁許士の実習に成功し、特に各会社の法律顧問として最初は地方的には国家的に非常な成功をおさめたのである。一九三四年から一九五二年迄の十八年間、彼は合衆国住宅協会に務め遂にワシントン市にある協会本部の理事になったのである。この時期にリチャーズ長老とその家族は活潑に教会活動に従事したのであった。リチャーズ長老は建築委員会の会長を務め、この時にチェビー・チエース・ワード部の美しい教会堂が建てられたのである。一九五二年に彼はワシントン市、ニューヨーク市およびソルト・レーク市の三地区で抵当、銀行、仲立の各業務を営む私設事業を起した。一九五四年に彼とその家族は、ユタに帰り、そこで彼はリチャーズ・ワードバリ抵当会社およびフランクリン・D・リチャーズ会社の社長となった。彼はまたその他幾つかの貸付けおよび投資会社の役

員である。彼と彼の家族は多くの責任による日々の事務に追われてワード部およびステーク部において教師または役員としての多忙な教会活動を続けている。三年半前に彼は合衆国の北西伝道部長に召され一九六〇年一月一日に東ミルクリーク・ステーク伝道部長に召されたのである。

リチャーズ長老は一九六一年早々、合衆国北西伝道部からソルト・レーク市に戻って、靈感された指導力をもって十二使徒会補助の新しいお召しに答へ、その全力を投じようと計画している。

— けんそんで、気どらない人 —

セオドル・M・バルトン長老

エラ編集員 パトリシヤ・ミドルトン

けんそんで気どらない人、新しい十二使徒会補助のセオドル・M・バルトン長老は、今度の新しい責任に召されたことを知った時、非常に恐怖した。彼は西ドイツ伝道部長として過去三年間務めて来たが丁度今帰ったばかりであった。聖徒たちや宣教師たちが皆一様に坐して彼の司会する集りに魅せられ西ドイツ伝道部の人たちへの彼の強い証に熱心に耳を傾けていた。これらの集会の一つで彼は別れの挨拶をする時次のように述べた。

「教会の中で、どのような責任を持っているかは問題で



＜セオドル・M・バルトン長老＞

ない。要は何か仕事を持ってそれをよくすることである」バルトン長老は、東カーシエ・ステーク部の郷里のワード部に帰って日曜学校で教える責任かまたは支部教師の職かその他いかなる職でも教会が彼に与える責任を受けようと準備していた。彼がそう語った時一人の宣教師がやはりバルトン長老の言葉に深く感動していた同僚の宣教師に向って「我々は彼がどこに行くか知っている」と立話しているのが聞えた。

人を漁る者たち

バルトン長老は明らかにもうとうそのような考えは持っていないが彼が解任になってから更に大きな主の御仕事にたずさわるのであろうと云う空気が伝道部全体を通じて感じられたのであった。けれども彼は教

会本部からそのような責任あるお召しがあろうとは夢想だにしなかったのである。

お召しを受けた時彼は、身に余る大任だが主の命じ給うことはいかなることも成し遂げさせてもらえる」と述べた。これが彼のゆるがぬ信念である。

主が私たちに何か特別な仕事又は使命を遂行させようとなさる時は、主は私たちをその仕事が行き出来るように強くなし給うのである。このことは彼がカーシエ・ステーク部のローガン第四ワード部の監督であった時に、証明され、その生涯において彼を最もけんそうにさせた経験であった。

「仕事は私の能力を越えたものでありました。けれども私は未だかつてなまなかつたことをなし得たのであります。私は権能の翼が単なる想像でなく真実であることを確信しています。私は他の監督たちと話をしましたが皆同様の証を持っております。」

バルトン長老の生涯はニーフアイと同様に始められたのである。

「よき両親の下に生れ……私の今日あるのは両親のおかげであります。そして私は私の家庭に於て私の両親が私に与えてくれた霊感と導きをよく自覚しております。」

彼は一九〇七年三月二十七日、ソルト・レーク市で、セオドル・テイラー及びフローレンス・モイル・バルトンの

本作者の漁人

息子として生れた。「私がもの心つく頃から両親はどこへ行くにも私たち子供を伴いました。私はお父さんに伴われて高等評議員任命の場に列席しました。そして彼は私にわかるように説明してくれました。私の兄弟と私は楽器を奏しましたので父は私たちに伴奏させる為によく集会に伴いました。その後私の音楽上の能力は私が教育を受け伝道に出るお金をつくるのに役立つたのでありました。父と母は機会をつくって私たちを教え家庭の実生活に福音を実践することによって私たちを導いたのであります。」

多くの人が、その信仰の根底をなしている特別なある事件または信仰を促進する唯一の事項について語る。そして彼らはその信仰を支える為に時々その記憶を呼び覚ますのである。彼の信仰は一段々と学んだ知識を重ね小さなことからの連続が年間を通じて逐次積み重ねられ、それが彼に回復された教会の教義の真理に対する強い確信といエス・キリストの神性に対する不動の証を得させているのである。「私の今日あるのはまた私の妻が私に与えてくれた支持と激励によるのであります。」

彼は一九三三年二月二十三日にソルト・レーク神殿でミニ・スーザン・プリースと結婚したのであります。彼らは十四才の一人息子、ロバート・プリース・バルトンを持っております。彼は義理のお母さんの昔話を好んで思出

す。彼はプリース夫人は義理のお母さんの問題についての世間の語り伝えが真実でないことの生きた証明であると信じている。彼女の娘ミニとセオドルが一年生に入學した当日、肩を並べて教室に入ったのを見ていた時、彼女は将来、セオドルが彼女の「むこ」になるだろうという印象を受けたのであった。

一九四三年から教えているユタ大学の化学科の教授としてバルトン長老は化学の分野における彼の勉学が神の法則をえ得ることに役立ったと強く信じている。

化学又は福音の原則、そのいずれを数えるにせよ、その実験室あるいは福音実践の日常生活において同一の根本原則が適用される。もしも我々が正確にその原則に従うなら我々は望む目的に達するのである。化学の法則または神の律法に従うことに失敗するとその結果は落胆すべきものとなるのである。

私は科学において秩序を学びそれが私の証を強めた。科学の分野において人は時に誤った判断を下すことがあるけれど、その誤った理論は実験によって是正され真理に導かれる。我々の宗教においては神が我々に与え給う誤りなき真理を我々の日常生活に適用することによって自分自身に証明することが出来る。

この新任の十二使徒会補助バルトン長老はソルト・レーク西高等学校を卒業してから、ユタ大学に学んだ。そこで

一九三二年に彼は学士号を受け、一九三四年に修士号を受け、一九五一年にバダウ大学より博士号を受けた。

彼はアメリカ化学協会のユタ部長を務め、またアメリカ大学教授会のユタ大学の部長であった。バルトン長老は趣味として作曲しているがユタ・ステイト・ユニヴァシティのアルマ・マター讃歌は彼の作になるものである。

大学に職を奉ずる前に彼はユタ州のプライス短大で化学、葉学及び数学を教えたのである。一九三二年から一九三四年迄彼はソルト・レーク市のバクテリア協会の副会長を務めそれから、ドイツのベルリン及びオーストリアのウィーンにおける合衆国財務官技術補助になったのである。

バルトン長老は一九二七年から一九三〇年までスイス・ドイツ伝道部に働いたが、その間彼はスイス、ベルンおよびドイツアルトナの支部長を務め、ヌスケルスイング・ホルステイン地方部長をも務めたのである。彼はこの伝道に召された時、当時、フン（匈奴のことで第一次大戦中ドイツ人をこう呼んだ）と呼ばれていた人たちの間に行って生活することいささか恐れを感じたのであった。彼は第一次世界大戦中に育ったのでこの民に対する誤った先入観を受けていた。彼はドイツ人から多くのことを学んだのであった。

人を漁る者たち
彼らは善良で強い末日聖徒である。彼らはよき指導者であり、決断力があり、高度な知識を持った教養あ

る民でまたエフライムの血統に属している。彼らは第二次大戦後、顕著な復興を見せている。もしも我々が投票を慎重にしないなら彼らと同様のことを起すのである。我々は常に自由の為に戦うべく、真実に我々の責任を果さなければならぬのである。

今やバルトン長老は他の新任十二使徒会補助と共にこの職の詳細を極めその責任をはっきりと認識している。けれども彼らの最大なる責任は彼ら各人がなしたイエス・キリストの神聖に対する証しの誓約である。バルトン長老は、一九六〇年十月大会の土曜日の午前に末日聖徒に厳肅な証をしたのである。

「マッケイ大管長は、私の責任は主として、イエス・キリストの神性を証することであると私に言われましたが、私は心からこれを証することが出来ます。私はイエスがキリストであることを知っております。私は神の子となることを彼と誓約しました。私はその名を証することを誓約し、私は常にその名に榮えあらしめ、ほまれをもたらし、決して榮えあるその名を汚すことのないように祈ります。」

◆ ◆ ◆
（四月号六一頁の上段写真説明に誤ちがありますのでここに訂正いたします。向って右の写真がセオドル・M・バルトン長老で向って左の写真がナサン・エルドン・ターナー長老です。）

のまえ 者さま 読みな 愛み



当伝道部における末日聖徒の機関として、「L・D・Sメッセージジャー」が発刊されましたのが一九四九年十二月、それが「聖徒の道」と改題されたのが一九五七年六月で、伝道部の機関紙発刊という十二年の歳月が流れております。

その間幾多の変せんをみながらも、今日みるごとき立派な伝道部機関紙として発展してまいりました。これは真に、愛読者である、あなたの協力と熱意の賜であると心より感謝の意を表します。

今、あなたが手にしておられる「聖徒の道」は、機関紙としての必要な内容をしだいに満してきております。教会の諸々のニュース、活動状況、報告、各補助組織への指導的記事、神権者の欄、系図の欄、幹部のメッセージ、一般的投稿記事など機関紙としては、後一息の点まできているのではないのでしょうか。こうして成長しつつある「聖徒の道」に対して、こんご、いかなることがあっても後退す

ることがないように、私どもは一層、みなさまのご協力をお願いしたいのです。

聖徒の道は、現在、三千部発行されていますが、実際に売れているのは約八割程度、出版に要する費用だけで、一部当り五十円かかり、その他に郵送料、発行までに必要な諸々の費用をいれますと、大分の赤字がでております。

この「聖徒の道」を現在のように維持するだけでなく、一層進歩させるためにも、発行部数を着実に上げていくことが、こののちに残されている課題なのです。ここに愛読者であるあなたの心からなる協力を信頼し、一人が最低三冊の聖徒の道を販売されることをお願いいたします。この提案にご協力いただければ、現在の三千部は販売でき、こんご会員の増加にともない、毎年非常に多くの部数が増加、販売されていくことでしょう。こうして将来には、もっと立派な体裁と、すぐれた内容を持つ機関紙に成長することができま

す。

大きな、美しい目標に向って、愛読者のあなたとしっかり手を取りあって、一步一步着実に、進んで行きたいと思えます。

どうか、しっかりと後から押し上げて下さい。「聖徒の道」はあなたの機関誌なのです。

「聖徒の道」発行人

ポール・C・アンドラス

佐藤 竜 猪

編集長

大塚 昌 治

副編集長

福 田 真

原稿募集



「聖徒の道」はあなたの豊さとともに成長するものです。
どうぞ積極的にご投稿下さい。

■ 信仰と証詞に関する体験について。

■ 「ともに考える」のための主題を選んであなたの考えを表現して下さい。

■ 二分半の話から、模範的なもの（時間、内容ともに二分半の話にふさわしいもの）を、お待ちします。

■ 支部、地方部のたよりをせひせび、忘れずに。（支部のどなたでも結構です）

■ 十代の人の証詞、意見、声をどうぞお聞かせ下さい。

■ 若き世代に与える、両親、指導者の言葉をもお待ちします。

■ 「聖徒の道」への意見、提案、企画、声、等もお忘れなく。

■ 一緒に、写真、カットもどうぞお送り下さい。

■ 姓名、年令をはっきりと、原稿用紙四〇〇字詰を使って、毎月五日まで、編集部事務局へ。

住所 東京都台東区二長町二九 電話（八三二）二八六三

「聖徒の道」事務局

■ こんにちは、「聖徒の道」の編集、発送はこの新しい事務所で行なわれますので、「聖徒の道」に関する問い合わせは、この事務所へ直接ご連絡下さい。

■ 購入申込は今までどおり、伝道本部においてのみ受付しますので、ご注意ください。

にかんがえよう

とも

信	者
の	
あ	り
	方



田	川
幸	子

(仙台支部)

と思う。

三月十二日、東中央地方部の地区大会が三会場に分かれて開かれました。仙台会場には、伝道部長夫妻らが出席、主の祝福を会員と共に、感謝しあいでしたが、大会に参加した人々は、説教の中からそれぞれ違ったものを感じたり、考えたりしたことと思えます。そこで、田川姉妹に自分の考えたままを、書いていただきました。(遠藤)

信仰とは信じて行なうことである。信仰は福音の実践であるということ、つねにいわれていることであり、私もそれでなければなんの意味もないと思う。しかしこれは当然のことであり、いうまでもなくだれにもよくわかっていてのことであって、ただこのことを何回言っても実際にはあまり役に立たず、ただいかにして実践するかということが問題であ

ると思う。こんどの仙台に於ける地区大会でも、私たちに神の福音を知った者として、隣人に宣教する義務があるということをはじめ、信者としてはまず行動しなければならぬということが、いろいろ話されたが、中でもとくに大塚昌治兄弟の話されたことが印象的でありいろいろ考えさせられた。

大塚兄弟は、べからず信者、ということばを用いた。すなわち、何々すべからずといひましめのみを守って満足している。あるいはそれで自分のなすべきことをすべてなしていると思っている消極的な信者のことであって、モルモンとしては最低の信者であるといふことを話されたのだ。何々すべからずといふいましめを守ることは、たしかに非常に大切なことではあるが、クリスチャンとしては

まず第一の条件であり、必要最低限のことであって、モルモンとしての正しいあり方は、もっと積極的に活動することが必要であり、それでこそ真の強い信仰が得られるということとを強調された。私はたしかにそのとおりだと思い、同時に自分もまったくの、べからず信者、ではないとしても、少くとも活動的とはいえない信者であることを思い、恥ずかしく感じた。

そして自分はこれからどのようにしたらよいのだろうかということを考えてみた。積極的に行動することによって神の導きと祝福が与えられて、あかしが強くなり、強い信仰を持つことができるようになるように思う。その積極的に行動することができれば問題はないうことになるが、これが非常にむずかしく、その結

果、べからず信者、が生まれると思うのだ。

私自身のことをかえりみると、まず神について知り、教会を知り、自分の進むべき道を見出した当時には、神の大きな愛に対する感謝と喜びでいっぱいであり、神のために自分のすべてを捧げようという決意を胸に抱いた。そして実際、力を尽くしてそのよう行動することに努力した。私はいま考えてみても、その状態が正しいものだったということができるように思っている。そして行動をとおしてだんだん強いあかしを得ることができた。ところがある期間を経た後に、私はいろいろの困難に直面し、その結果、自分の能力や将来の生活、さらに信仰生活自体にきえいろいろの矛盾があるように思われてき、疑問が生じてきた。以前にはたしかに正しいこと、善と思われていたことが、必ずしもそうとは思えなくなってきた。そして自分がいましめどおりに行動しているにもかかわらず、神さまは約束を果たしてくださらないということを感ずるようなときもあった。以前には実ははっきりと明瞭にみえていたことが、なにかぼんやりとして、確信の持てないものになってきてしまった。

そのときに私は自分の考え方がまちがって

いるとはどうしても思うことができず、当然だれでもこういうことを考えるときがあり、そのうちにまた、もとのようになるのではないだろうか、などというように考えた。しかし私はその後、自分がそのようになった原因を考えてみた。そして私はひとつのこと、すなわち、私がかつて聖典をあまりよく自分の目で読んではいなかったというところに気がついた。さまざまの集会に出席するときには比較的まじめにレッスンを受けていたと思うが、実際に聖典を自分で一生懸命に読むことをしなかったので、教義も他の人々から聞いたことであって、断片的に頭の中に積み重ねられていたように思われる。そのために教義のある部分のみを知ったときには片寄った行動をし、他の部分を知ったときに、矛盾に思われたりし、その結果、正しい行動がなんであるかわからずに、自分の信仰にも行動にも自信を失ってしまい、結局、べからず信者、とはいえなくとも、不活発な信者になってしまったのだと思う。

そして私はいま一番大切なことは、福音を正しく理解すること、すなわち神の意思を正しく知ること、それを忘れないことであると思っている。そしてそのためには自分で祈

りながら一生懸命に聖典をくり返して、つねに読むことが必要だと思う。たしかに人間は不完全であるため、自分の力のみでは何事も確信することはできず、神の力を与えられなければだれも自分の考えをたしかに正しいということはできない。すなわち、聖典を読むときにもいつ私たちは誤った解釈をするかわからない。そしてそのようなときに問題が生じ、福音には矛盾があると考えがちになるが、そうではなく、それは人間のほうに誤りがあるのだ。

福音を正しく理解するために必要なまたまの導きを与えてくださるよるにつねに祈りながら聖典を読むことよってのみ神の本当の意思を知ることができ、自分の行なうべきことを正しく知り、自信をもって行なうことができ、そしてその行ないをとおしてさらに神の導きを受け、あかしを強めることができ、迫害にうちかつ強い信仰を得ることができると思う。要するに信者のあり方として、行動をするともに、まずその行動のものとよって得ることが必要であると思う。

(学生)

質問への答

律法なくして死に たる者の救い



解答者 ジョセフ・フィールディング・スミス長老

(12使徒会会長)

質問。「教義と聖約」の第七十六章七十二節には、「律法なくして死にたる者」は月の光栄の世界にその居るべき場所を受ける、という意味の言葉があります。もしこれが本当なら、いままでキリスト教について何も聞かずに死んだ人々のために神殿の儀式を執り行っても何の希望もないではありませんでしょうか。或る人たちが結論するように、もしこのことが異教を奉じている国民にだけあてはまるとすれば、キリスト教の名前さえ耳にしたことのないハワイ、日本、中華民国、その他の国の人々は、どうして自分たちのために神殿の儀式をしてもらうことができるでしょうか。

アルマは「善も悪も一切の人々の前にある。善と悪とを区別することのできない者はこれを責めることができない。しかし、善悪の区別を知る者は善を好むも悪を好むも生を好むも死を好むも、また喜びを好むも、良心のとがめを好むも、各々その好むところに従って与えられる」(アルマ書二十九〇五)と言って居ります。

もしも主の言葉が律法であるならば、「教義と聖約」第七十六章七十二節にある「見よ、これらの人々は、律法なくして死にたる者なり」と言っているところの「これらの人々」とは誰のことでありますか。

答。主はその子らを一人のこらず義しく取り扱いたもうにちがいない、またあらゆる「人間」は一人のこらず正しい報いを受けるにちがいないということ、間違いないであろう。この「死ぬべき身」を持った此世の生活には大きな目的がある。何の目的で此世へ来たかと言うに、それは「人間」の霊が骨肉の体に宿るためであって、骨肉の体に宿らなければ「人間」の霊は日の栄の最高の天界にまで昇ることができないし、また復活の際に霊と体とが再び合して

復活体を得なければ「完全」になることもできないからである。アダムとイヴがこの地球上に置かれて、生めよふえよという神の命令を受けたのは実にこのためである。アダムはエデンの園を追われてから、その子供たちに完全な「救いの計画」を教えよと命ぜられた。ところがやがて、アダムの子孫は神に叛き、その結果大洪水によって亡ぼされた。その後主はノアとその家族に再び誠命を下したまい、かくの如くして前と同じ誠命が再び新たに与えられた。大洪水以前の「人間」と同じように、ノアの子孫も神に叛いて偶像崇拜が起った。その結果実際に存在しない神々の崇拜がいたるところに行われた。ついに人類は全地の上に散らされて墮落腐敗と悪事がいたる所に見られるに至った。これらの民の中には獣よりもましな状態に陥ったものもあった。世代を追うてこれらの民は一層墮落して、ついに善悪正邪の見境いもつかぬほどとなった。「高価なる真珠」アブラハムの書には、靈界には多くの靈があつてその中の或る靈は他の靈よりも偉大であるから主はこれらの靈を主に属する支配者になしたもうた、という啓示がのつている。これに反して、靈界には英知に於て劣つている故に、明らかに忠実な靈たちに提供される「昇栄」（日の栄の最高天界に昇ること）にいくらかふさわしくない靈たちがあつた。それにもかかわらず、これらの靈たちにも、復活した後に神の前から追放される者たちの受ける死と苦惱から救われる資格を与えられた。それであるから、主はこれらの靈たちにも処を備えたまい、かくの如くしてすべての者に対する主の慈悲を示したもう。

われわれはモーセに与えたもうた主の御言葉から（申命記三十二〇八一―九）、イスラエルの子らの生れない前から、主はイスラエル

の子らに一つの場所を選びたもうたということを知っている。主はこのようにして、居る所を定められた多くの靈たちがヤコブの子孫になることを示したもうた。われわれは、主がまたそのほかのすべての民にも地の表面をわけ与えたもうたということを信じてみさしつかえない。これらの地のある部分は、「救いの計画」に対する関心を失ってしまったか、または「救いの計画」に共鳴しない民の住むための所として明らかにとっておかれた。われわれは、主がほかの靈よりも一層の進歩をし一層資格のある靈たちを、この地上に住む不信心な、進歩の劣つた民の家族たちの所へ来るのをお許しにならなかったと信じてみさしつかえない。しかしながら、この地球上へ来ることは進歩の劣つた階級の靈たちにも与えられる特権であつて、彼らが「死ぬべき身」を持った人間としての生活の中にある数々の祝福を受けることは絶対に必要であつた。しかし、この問題についてはごく僅かしか啓示されていないのであるが、一層の進歩をし一層すぐれた英知をもつた靈たちは、墮落した異教徒の種族の中へつかわされることが絶対に必要であつたことが確かであると思つてもさしつかえない。これら異教徒の民は、このような事情の下に、無知と靈の暗黒の中へ陥いつてしまった。このような事情の下に生れた子供らは「昇栄」を得ることはできなかったであらう、それにもかかわらず、主は恵み深くましましてこれらの者にできるだけのことを一生けんめいやれと命じたもうた。神のことについて何も知らなかったなら、これらの者は律法なしに審きを受けて、復活の後に或る場所、すなわち忠実な者に約束された「完全」を受けることなしにこれらの者に適した或る場所を割り当てられることになるであらう。

何らの律法も持たないなら、彼らは律法なくして審かれ、神はその知恵によって彼らの事を律したもう。彼らを現在の状態に置いたのは彼らの不幸であつて、彼らの各々が罪を犯したのではないからである。しかしながら、彼らの歴史をさかのぼつて尋ねると、イスラエルの子らの場合と同じことを、その反対の意味に於て見出すことができるであらう。彼らが現在暗黒と不幸な状態に在るといふことは、もとを尋ねると神から離れたことによるのである。彼らの先祖がその知識の中に神をとどめておくことを欲しなかつたから、神は現在の暗黒と混沌とみじめな状態の中へ彼らを捨てたもうた。この問題については、ロマ書第一章二一節から二十八節までにあるパウロの言葉を参照されたい。家族の場合にはもちろんのこと、この場合にも、先祖がその子孫の上に大きな影響を及ぼすのは当然であるからである。それであるからユダヤ人は、アブラハムと神との間に結ばれた約束の結果、一つの国民として祝福を受けるにちがいない。それは前に述べたように、これらのことは永遠の原則であるからである。すなわち「人間」は永遠に存在するものである故に、「人間」のすべての行いは永遠に関連するからである。現在、人の父親たるものすることは、家族としても国民としても、今も永世にもわたつて、その子孫の上に関係と影響とをもつのである（「神の制度」五十二頁参照）。

主の偉大な御業は「救う」ことであつて「亡ぼす」ことではない。それであるから、ついに悪魔とその使者たちと共に投げ出される者は、真理を捨ててことさら神に叛く者だけである（「教義と聖約」七十六〇三十一—三十八参照）。

これまでにかつてこの地球上に生を受けたことがあり、その上律法と規定の下にあつて善悪の知識をもち、神の真理について何ほどか理解をしていた者たちは、彼らに人間の言い伝えがしみ込んでいても、すべてその持つ知識によって審かれるにちがいない。これら

の者の中には、かつてキリスト教徒であつた者もキリスト教徒でなかつた者も多く居るが、これらの者は律法と規定の下にあつて、正義と公平とについて義しい理解をいくらか持つていた。これらの者は、悔い改めをするならば、神の国に救われる資格がある。神の律法に従つて生活をするようになって、神の国の祝福を受けるように私たちが神殿の儀式を執り行ふのはこれらの人々のためである。

（千九百六十一年二月、インブルヴメントエラ誌八十頁）

汝等もし我を愛せば、我が誠命を守らん。（ヨハネ伝一四・一五）
人もし「われ神を愛す」と言いて、その兄弟を憎まば、これ偽者なり。既に見るところの兄弟を愛せぬ者は、未だ見ぬ神を愛すること能はず。神を愛する者は亦その兄弟をも愛すべし。我らこの誠命を神より受けたり。（ヨハネ第一四書・二〇）（二一）

「神を愛す」と言いながらその兄弟を憎む程馬鹿氣た事はなく、「神を信ず」と言いながら義しい人を信じない程無意味な事はない。神を愛し、兄弟を愛する。この二つを心の底か

Gems of Thought

人の愛と神の愛

ら為し得た時、初めて君たちの歩む人生の行路が満足に値することの証拠が出来たと言うべきである。君たちは、兄弟たちの内に幾多の欠点を見た

と考へているかも知れない。しかしよく考へてみよう。彼らも亦君たちと全く同様に組織されたのではなかつたか。彼らの肉は君達の肉、彼らの骨は君たちの骨なのではないか。そして又彼らも、君たちの等しく信する父なる神に属しているのではないか。我々はすべて、父なる神の子供たちなのだ。それならばお互に、出来うる限り満足し合うべきではないか。

我々は、愛の仕事を、先づ我々の属している家族から始めて、次第に他へと及ぼして行くべきだ。

ブリガム・ヤング

アララツド山中に発見されたものは ノアの箱船の痕跡か？

世界は広く、時々途方もないニュースが世界の各地から伝えられて来ます。これは昨年十二月中に発刊された、アメリカの有名な「ライフ」と云う雑誌にのせられていた記事であります。

そのニュースと云うのは、最近東トルコのアララツド山脈中の標高千八百米の尾根に見されたある痕跡が「ノアの箱船の跡ではないか」と云う驚くべきニュースなのです。

「ノアの箱船」と云えば読者もご存じの通り、旧約聖書に現われた奇蹟の船です。紀元前二千四百年前ノアと云う予言者の住んでいた時代に、この地上は全く罪におおわれていました。エホバなる神は、神より召された予

言者の悔い改めよと云う勧めに従わない頑く
な罪に落ち入った人たちを地上より取り去
り、主に従う一族だけを残して、もう一度
人類を再出發させることにしました。

このエホバなる神の啓示を受けたノアは、
主の命じられた通り、大船を造りました。
その大きさは、全長四五〇呎（約一三五米）
幅七五呎（約二二・五米）、深さ四三呎（約一
二・九米）の頑丈な屋根つきの船をこしらえ
ました。そして、七日の出発準備の後、一家
のものが、森からかり出してきた各種一つが
いずつの生物（新しい世界に繁殖させるた
めのもの）と共にその船に乗りこんだ時、一
天にわかにかきくもり、激しい豪雨となりま

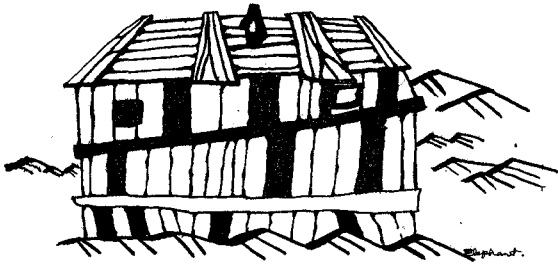
した。そして、この豪雨が四〇日四〇晩つづ
いて、この世界の全生物がその大洪水の中に
溺れ死んだ後、雨は上り、洪水の日から約一
年の後に箱船のおおいを取り除いて見ると土
の表は全く乾いていました。

この新しい土地に降り立ったノアの一家と
各種の生物から、再びこの後の地上に生物が
生じてきたのです。（創世記六、八章を参照
して下さい）
「……それで水はしだいに地の上から引い
て、百五十日の後には水が減り、箱舟は七月
十七日にアララテの山にとどまった……」こ
の箱舟の上陸地点がアルメニアとトルコの国
境近くにある前記アララツド山脈のあたりと

言われ、昔からアララッド山は「箱舟の山」だとか、「ノアの山」などと呼ばれてきました。そして昔からそのあたりに箱舟の痕跡を探そうという試みが幾度となく行なわれてきたのです。

所が、昨年の九月十一日トルコ陸軍の陸地測量部の一員であるデユルピナル大尉が、航空機上から撮った何千枚という東トルコ山岳地帯の航空写真を点検していた時、偶然その一枚に不思議な汚点が写っているのに気がつきました。そこで、念のため、スライドに当て、ルーペで覗いてみた大尉はおどろいたことに、それが全長五〇〇呎、幅三〇呎程もある巨大な船形をして

いることを発見したのです。これは驚くのが当然でしょう。こんな地中海から遠く離れた火山地帯の山頂に、こんな



船のようなものがあるべきはずがない。そこで、早速、特別に編成されたトルコ陸軍の探険隊が調査に出かけて行ってみると、そのあたり一帯は一定の厚さをもつ全溶岩流におお

われた溶岩地帯であるのに、その船形の部分だけは、まるで周囲の溶岩流がそこでキッチリとせき止められたようにはっきりとした船形となって冷え固まり、その内部だけが比較的軟かい土と緑色の草によっておおわれているのです。しかも船底にあたる部分はこのもりと土がもり上っているのに、溶岩流がせき止められている船側部までの周囲一帯は、地形がえぐるように落ちくぼみ、五・六米ほどの深さとなっていました。

その上、その大きさは、実際に測量してみると何と長さ四五〇呎、幅七五呎と正確に聖

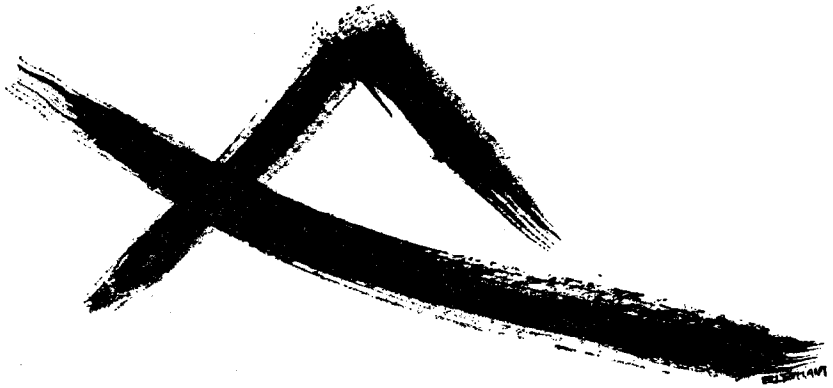
書にある大きさと一致していたのです。

この驚くべきニュースは、たちまち全世界に伝わりました。そして米国オハイオ州立大学の教授で写真測地学の世界的権威であるアーサー・ブランドンバーガー博士は、この原ネガを88を調べたあげく、それが確かに「ノアの箱船かどうかはわからないが」「船の跡だ」と断定したのです。

しかし、もしこれが聖書に言うような木製の船の痕跡だとしたら、どうして周囲の熱い溶岩流が、その舷側を焼いて、内部に侵入しなかったのでしょうか？ それについて、トルコ陸軍測地部長のソイダン少佐は、「それは多分、溶岩がこの船を包んだとたんに冷し固まったのか、又はそれ以前に船が化石になっていたのだから……」と語っています。

さて、そんなわけで、目下アメリカ政府を後盾とするブランドンバーガー博士一行の探険隊が、この地帯は、国境に近く戦略上重要な地点であるからというトルコ政府の強硬な反対を強引に押し切って、この一年の九カ月は肌をさすような寒気に包まれ、零下四五度を越すことも珍らしくないという「悪霊の地」で困難な発掘作業を行っているといわれていますか、果してその結果はどう出るのでしょうか？ とっても興味ある所ですね。

はいす



話の屋号

夫偉中田

系図はいうまでもなく、古いものほど価値があります。古いといわれるには、すくなくとも江戸以前の古文書類をあつかわなければなりません。これら沢山の資料のあつかいかたはどうでしょうか。それには特別な知識がいります。といって誰も完全に持っているとはかぎりません。もし系図探求にあたって気を病むとすれば、ただそのことだけです。このひとつに屋号の問題もはります。まだほんの序の口程度の仕事ですが、参考までにすこしまとめてみました。系図探求に一番必要なものは、戸籍関係の書類です。江戸時代でいえば床屋文書のうちにふくまれる五人組帳や宗門人別帳などがそうです。こうした古文書類を読んでいると、みなさんはきっと人名について妙なことにぶつかるはずで。

明治以前の庶民は姓を持っていませんでした。侍以外は、商人ならば田原屋の藤兵衛、紀之国屋五助とか呼ばれ、かならず屋号と名前とがひとつになっています。名前はともかくとして、その上につけられた屋号は、いつたいなにを意味しているのでしょうか。こんな考えを持たれたことはありませんか。実はこの屋号のなかにいろいろなるものを秘めているのです。そのすべてを知ったとき、一枚の古文書はまさに一編の小説にもひとしい面白さ——すこし大げさかも知れませんが——を味わわせてくれます。

さて今ここで取りあげた屋号とはどういうものでしょうか。試みに手許の辞書をひいてみました。屋号(名) 商家の商号と出ています。これは実に簡潔ですが、それだけに意味も不完全です。もう一步ふみこんで考えてみましょう。すると屋号は、住居や家筋につけられる呼び名と俳優につけられる呼び名ということになります。

これが本来の屋号であります。商号としての屋号、つまり俗に「のれん」といわれる性格のもの、派生的なものだと考えたいのです。この苗字とは別に住居につけられた呼び名、これを方言では(いえな)(かどな)(かぶな)(こな)(あざな)などと呼ばれています。

文献「宅山石」によりますと、屋号がはじめて使用されたのは室町時代でした。応永二七年の中原康富記に「天大路亀屋」と書かれ、康正元年十一月三十日の書状には「綾小路大宮酒屋」と記されてあります。またこの他に魚屋とか鯛屋などの名もみえて居ります。この頃からぼつぼつ屋号らしいものが発展してきました。その原因を考えてみましょう。

ひとつの村に同姓または同名のものが多くこれを区別するために適当な呼び名が必要となつたこと。他のひとつは、もともと特定の家であつて、紛らわしきはなかつたが、その苗字を卒直にいうことを遠慮するため、丁度上代の女性が実名で呼ばれず、仲間の職名、局名などによって紫式部、桐壺、赤染衛門などと呼ばれたのと同じ意味で呼ばれたものも

あります。

屋号のつけかたは大別すると二つあります。一、その位置や地勢によって住居そのものにつけられたもの。例えば、原、坂ノ上、寺の前、宮の川、杉下がこれにあたります。

二、本末関係、職業(商家)、出身地、先祖の名などにより、その家筋に対してつけられたもの。本家、隠居、米屋、公文所、紀伊国屋五兵衛屋敷、新宅などです。

前者は居住者が変わっても原則として屋号は変わらないことが多いですが、後者となると、あくまでもその特定の家筋についたもので、居住者が他に移ればその呼び名もともに移つてゆき、苗字の場合と大変性質が似ています。なお現在用ひている姓に、屋号の転化したものがあることを申しそえておきます。

最後に歌舞伎俳優の称号ですが、俳優は御存知のように芸名のほかに商人の屋号と似た屋号をもっています。今の歌舞伎役者と違い徳川時代にあつての彼らの存在、ないしは社会的地位は実にはびびたるもので、いまだに川原乞食、川原者という言葉が残っているくらいです。前にも書きましたとおり、武士と豪士のほかは農工商いづれもよほど特殊な、例

えばなにかの功または財産による苗字帯刀の許を得た者以外姓を許されなかつたわけです。そこで百姓は村の名、職人は住所名、商人は屋号を姓の代用としていました。こうしたなかであつて、歌舞伎俳優は常に眼にみえない圧迫をうけ、多くはひとつの部落を作つて生活してました。彼らはとかく四階級以下であるとみられやすく、人々のそうした錯覚から逃がれるため屋号を名のつたのもっとも大きな原因でした。更に当時の俳優たちのなかには内職に化粧品、小間物、薬品などを商う者もあつたためもあります。が、それはあくまでも主因ではありません。この俳優たちの対社会的な劣等感によって生れた屋号も、現在では見物の彼らにたいする親しみを表わす呼び名となつて、屋号としての特異な形態を作り上げたのであります。更にこの屋号のいわれをみると、歌舞伎の変せんをうかがうひとつの手がかりとして、大いに面白味のあることも言えました。

一九六一・一・十一

(横浜支部)

メルクゼデク神權

先月は定員会の委員会について述べましたが今月は第一長老定員会として現在計画しているあらましを説明してみます。

長老定員会の目的は何かと問われる時に我々は「一口に言ってしまうれば長老並びにその家族の福祉向上をはかることである」といつも申しているんですがそうすると長老以外の会員および家族のことはどうなるのかと言う質問が必ず出てくると思います。そこで我々は「現在長老でないものもいずれば長老になって定員会の仕事をするようになるのであるから最終的には前者のような意味になると信じているんです」。しかしまだ誤解を招くおそれもあると思いますので現在のところは「会員およびその家族の人々」とした方がよ

第一長老定員会の計画

いかも知れません。この所をお含みおき願いたいと思います。

さて長老定員会が一応組織されてから約五カ月経っているんですがまだ長老定員会として具体的な活動は行っておりません。皆様もごしようちの通りこの教会ではどんな活動でもより良い組織を通して行わなければよりよい活動は出来ないであります。現在会長と第一副会長は決ったのですがまだ第二副会長並びに書記そして各支部のグループリーダーとその書記が選ばれていないような有様なのです。弱小の組織で大きな活動をするには大変危険なことですので慎重にいきたいと思っているのです。しかし京浜地区の各支部に属している長老の方々の実体は大体つかむことが出来ましたのでこれから徐々に組織づくりを進めていく計画であります。

今までのところこの北部極東伝道部は色々な面で組織が弱かったため物質的な方面の会員に対する援助はあまり出来なかったのではないかと思っております。我々はこの世でも精神的あるいは霊的な救いと共に物質的な恵みを受けることも非常に大切なことであります。このような点で我々長老定員会としては是非とも会員の方々の物質的な面の御援助も

出来るようにこれから努力していきたく思っているのです。これを通して会員は実に精神的な面の向上をはかることが万能になる場合もあると信じています。

しかしこのような計画を立てるにしても先立つものは資金ですのでこれから前にのべた組織づくりと同時に資金づくりもやっていく積りでいます。資金づくりの具体的な一つの方法としては学習塾です。これは小中学生並びに高校生の学習指導をやって資金を集めようというものです。その他にも若干の計画を立てていますが、もしこれが効果的であるならばグループリーダーが選ばれた時には、お願いしてもよいと思っております。そしてこのような手段を通して将来は福祉計画も立て更に飛躍的な発展をとげることも可能だと思えます。

我々は微力ながら皆様へ近き将来何かの形でご援助出来ることを念願してこの長老定員会の仕事に精を出していく積りです。まだこの日本の地に於ては全く新しい未知な組織でありますので我々のいたらぬところもあり色々と誤解を招くこともありうるかと存じますがどうか疑問の点がありましたら遠慮なく長老定員会まで申し出てくださるようお願いいたします。そしてよろしくご理解の上ご支援下さることを心から願っています。